

過▲き行はんるにありす一時るちく行衆す*り聲ね摩即曉の△
 ぎ成也と隨も方合るに定にをて隨す全る若、聲とをち鐘鳴一
 んの自法は師には法經時と行に般時し、と三鐘とし百八
 とすの正なせ機家經時と行に般時し、と三鐘とし百八
 半すの式らた根も行々す立な經一行な八重六じは
 刻べ

歩急走馳騁するを得ず、直に
 面前一尋許りの地を觀て詳緩に
 して行け、然して躬まず仰かず
 して歩を運ぶ也、傍觀より之を
 見れば、只一處に立つが如くす
 べきなり、肩胸等動搖して振ふ
 可からざるなりと、
 【大小便に赴く時】坐禪中、大
 小便等に赴く時は、坐りたるま
 りにて袈裟を脱ぎ、疊み了つて
 函櫃の上に安さ、合掌して、身
 を起し、歸堂の後、又如法に搭

けて坐す、
 【早晨坐禪】早晨坐禪とは午前
 九時又は十時頃の坐禪を云ふ、
 即ち普請の後に爲す坐禪なり、
 維那、坐禪牌を僧堂前に掛けさ
 せ、長版三打、搭袈裟にて面壁
 す其他後夜と同じ、庫堂の火版
 を聞いて堂行前後門の帳簾を揚
 げ、坐禪牌を下し、順次散堂す
 ると後夜坐禪の如し
 【坐禪牌】坐禪牌は早晨坐禪の
 時に限りて掛く、其餘の坐禪の

●對前此規風は經×なりと正たるきてく互印◎鈴通▲鐘鳴*九る
 ●照の責にに、行一りをしるよいとく姿の度經と開▲とし*時は
 跌せ冠し非て明す衆共と示く語りとが、をてとふのをじ、鐘也午
 とよ註あず、末る共とせ歩に云の、をた往敷は也振普、齋の 后

時には掲げざるを法とす、

第四、赴粥飯法

其一、赴粥法付赴飯法

【入堂】諸寮衆は長版を聞き
 入堂し、聖僧に向つて斜に問訊
 して本位に至り、隣位、對座問
 訊
 【上牀】右の手にて左方の袈裟
 及び衣の袖を腋の下へ收め、左
 の手にて右の袈裟、衣袖を收め

兩手にて膝の袈裟を褰げ、之を
 左の手にて持つとし、右の手
 を牀にあて、鞋を脱ぎ、鞋を
 牀下へ入れ、牀に腰を掛くるや
 うにして、兩手にて牀を抑え、
 臀部を牀に摺り上げ右の脚を縮
 めて牀に登り、左の脚を收めて、
 正坐す、之を上牀の法とす、
 六知事、侍者等は堂外の上間に

口聖僧侍者
の略稱す
と略稱す
●上の法を
粘るべし
◎若し住持
赴堂せざ
時は七下
なは七下
及下は七
に坐すな
×佛はな
毘羅陀に
て摩訶陀
成道し波
奈に説法
拘締玉に
滅來の應
器來の今
展する願
はく共は
等衆し三
輪切願

して自位に就く
大衆も鉢を右の手にて取り、兩
手にて座前に安ず
【展鉢】維那は位を離れて入堂
聖僧前に問訊し、合掌して槌砧
の傍に至り、問訊して打槌一下
す、大衆合掌して唱へて曰く
佛生ニ迦毘羅
成ニ道摩揭陀
説ニ法波羅奈
入ニ滅拘締羅
如來應量器
願共一切衆
我等得敷展
等三輪空寂
唱へ了つて、鉢を包める袱子の

結びを解き、(左の手にて覆ふや
うに、結び目を抑え、右の指に
て一端を引くなり)先づ鉢拭と
匙筋袋とを假に膝の上に置き、
淨巾を展べて膝に蓋け、複袂を
開いて、外の一角は其まゝ垂れ
させ、他の三方は角を少しく裏
へ向けて折り、兩手にて鉢單を
開き(兩方の端を摘んで斜に左
右に引けば、自然に開くなり)
之を右の手にて持ち鉢を覆ふや
うにし、左の手にて鉢を擧げ、

空寂ならん
●三輪空寂
と略稱す
●上の法を
粘るべし
◎若し住持
赴堂せざ
時は七下
なは七下
及下は七
に坐すな
×佛はな
毘羅陀に
て摩訶陀
成道し波
奈に説法
拘締玉に
滅來の應
器來の今
展する願
はく共は
等衆し三
輪切願

手早く鉢單を鉢の下即ち複袂の
上に置き、鉢を鉢單の左の方に
安く、
それより兩手の頭指にて鉢の中
の鏡子を小なるものより順次に
出して、鉢單の右側に列べ、最
後の頭鏡は中央に置く、
次に匙筋袋を開きて先づ筋を出
し、次に匙を出し、鉢單の上、
鏡の手前の方に置く、匙は仰向
けに置くべし、匙筋共右の方へ
頭(粥飯に觸るゝ方)を向けて

置くを法とす、
次に刷を取り、縦に布のある方
を内に向け、頭鏡と第二鏡との
間に置き、匙筋袋は三つに疊み
て、鉢拭と同く鉢單の下か、又
は鉢單の右へ置く、
【十佛名】維那打槌一下
●仰惟三寶、咸賜ニ印知、仰憑ニ
尊衆一念佛
と唱ふ、大衆合掌し十佛名を唱
ふ、一槌毎に維那打槌す、
【施食の喝】維那は又唱へて云

部味食粥せくの施佛×らてし果入ヤ徳利◎ヲを仰知は●にの
 味はのの同有す及三ん常て報をク益あ粥を三仰おの
 見名三十を情と法僧六に究無安へつに揚て賜きく其
 よ數徳利を供と界に樂竟邊んしネての念衆へ成推なり
 の六、養普界に味なしにずての念衆へ成推なり

◎粥有十利、饒益安人、果報無邊、究竟常樂、(粥時なり)
 ×三徳六味、施佛及僧、法界有情、普同供養、(齋時なり)
 【喝食】喝食行者は初め展鉢の偈の時に維那位に至り、維那に代つて展鉢し、十佛名の第四「當來下生」と云ふ時に、前門の南頬より入つて聖僧に問訊し、聖龍の後より住持、首座の前に問訊し、前門内南頬版頭の畔に還り、斜めに聖僧に問訊し又手し

て立つ、さて施食の偈の終る時に、喝食するなり、
 淨粥(粥時)
 香飯香汁(齋時)
 【行食】喝食の聲に連れて淨人一時に入堂し、各々好適の處を定めて順次に行食す、即ち、一人は首座位より後堂位に至り、終りに住持位に至る、一人は西堂位より立僧位に至るを順とす
 【齋時の心得】香飯香汁一時に行く時は、香汁は一人後堂位

議にりを空やへ發日の彼身●の其行間偈て△な類とりのは×
 にて、付き否きに自との功如順くにを、種りのは、第一門堂位
 り考付れやや徳應已は功とし序べ香唱五を、第一門僧位南位
 ふはと否行めじが、食業ははし菜ふ觀打、一門僧位南位
 る心なやはり得供、物、自前、をるのち、位南位な類

より首座位に到り、終に香飯と同く住持位に至るべく、他の一人の香汁は立僧位より西堂位に至る、總て香飯と反對に廻るべし、
 【外堂行食】堂内の次に外堂の諸位に行食す
 【香菜】齋時には香菜を喝す
 【遍食槌】維那は此時遍食槌を一下す、大衆は槌の聲を聞きて普同合掌し、次に又手を胸に當て、低頭(之を揖食と云ふ)五

觀の偈を想念し唱へて曰く
 一には、功の多少を計り、彼の來處を量る
 二には、己が徳行の全缺と付つて供に應ず
 三には、心を防ぎ、過を離るるもは貪等を宗とす
 四には、正に良藥を事とするは形枯を療ぜんが爲なり
 五には、成道の爲の故に、今此の食を受く
 (維那は槌を打ちたる後、槌を

清規の文に
從ふ又鬼神は
食の文に
衆供我今汝
此に食十方
遍鬼神と共
切鬼神と共
をせんと訓
べしと訓
す世界に處
空の如くは
華水の清著
し心清淨如
に起てん彼
首禮て無上
尊主のす稽
養施はす供
の命はす祈
ものは爲新
又禱速或供

て代つて表を伸宣す、伏して
惟れば慈證「大日本國何府
縣區郡市町村何誰今何々吉
（何靈忌）辰に値ふ、敬んで
當山に就て淨粥（齋）を修設し
十方常住の三寶に奉獻し、
一會現前の僧伽に供養す、集
る所の鴻福は、何々氏名福壽
延長信根不退（何々靈位莊嚴
報地圓滿菩提）に回向する者
なり、謹て疏「伏して請ふ三
寶悉知聖賢炳鑑、上來の文疏

已に具さに披宣す、聖眼私
無し諒に昭鑑を垂れ玉へ、仰
いて尊衆を憑んで念ず、
（之より直に槌を打ちて、十
佛名となるなり）
【洗鉢法の指南】洗鉢の法先づ
衣袖を收めて、盃盃に觸ると
莫れ、頭鉢に水を受け、今は熱
湯を用ふ、鉢刷を用ひて誠心に
右に頭鉢を轉じて、而して洗ひ
て垢膩を除か教て淨ならしめ、
水を頭鉢に移して、左手に鉢を

善もありの道
仍ては兩様の
文に書きある
なり此の疏の
授戒會の用は
飯臺にも用な
ふるものな
り「附言」疏の
讀み方は書
き現に指し
先を指し示
伏して請ふ
以下は仰
以三寶と仰
々々と同意
なれば同
る時は仰
雲三寶は仰
口洗鉢法を
新に起稿せ

旋らし、右手に刷を用ひ、盃盃
の外兼て盃盃の内を洗ひ、如法
に洗ひ訖つて、左手に鉢を托し、
右手に鉢拭を取り、鉢拭を展べ
教て、鉢に蓋ひて兩手に鉢を把
つて順にして輪轉し、拭ひて而
して乾かしめよ、然して後鉢拭
を且く盃盃の内に安いて外に出
さ教ると勿れ、盃盃を鉢標の上
に安じ、次に匙筋を頭饋に洗ひ、
洗ひ訖つて、鉢拭に拭ふ、此の
間鉢拭をして全く盃盃の外に出

さ教ると莫れ、匙筋を拭ひて以
て匙筋袋に盛りて、而して横に頭
饋の後に安ず、次に頭饋を第二
饋に洗ふの時、左手を以て鉢刷
と頭饋とを把り、合せて略提し
て、右手を以て第二饋を把つて、
而して頭饋の位に安じ、然して
後水を渡して頭饋を洗へ、第二
第三饋を洗ふとも之に準ぜよ、
饋子匙筋を頭鉢の内に洗ふとを
得ざれ、先づ頭鉢を洗ひ、次に
匙筋を洗ひ、次に頭饋を洗ひ、

●之は五等月
 十の日は五
 恒なる法堂
 此の開堂法
 とを相左酌
 進退を定め
 べきも右
 △白槌師位
 は舊時西
 におききた
 どおききた
 は便利と定
 めて東と定

今已に何某上座を請し得て、
 前堂首座に充て訖んぬ、謹ん
 て白す

打槌一下して位に歸る、
 堂行手磬一通、首座大衆、普同
 觸禮三拜、住持も同く拜す、
 住持出堂、首座歸寮、大衆散堂
 之にて入寺請首座の式は終る也

其二、上堂法。

【準備】一、燒香侍者前晚に住
 持に稟申し、當日粥前に復稟申

して「上堂牌」を法堂に掛く、

- 二、法堂の莊嚴は(後の開堂)
 - 佛前に法被を掛けると
 - 東西に紅縵を張ると
 - 須彌の中央に曲椽置くと
 - 法座の東に槌砧を置くと
 - 白槌師位を東に置くと
 - 法座の前の卓に銀燭一對
- 香爐一個を置くこと
- 三、時到つて(九時か十時なり)
 - 堂行先づ首座に報じ、侍者に
 - 報じて鳴物左の通り行ふ

▲小參鼓の
 と俗にチン
 太鼓と云
 ふ鳴らし
 方は鳴ら
 物心を得
 り、心に
 口大鐘を
 つと黄鐘
 規は用ひ
 今意はす
 注方行は
 *表方丈
 め子を設
 椅子をけ
 置くべし
 ×五侍者
 順序古規
 僧堂清規
 に侍香等
 書は侍香
 衣鉢、湯
 と鉢、湯
 ら斯く定
 る、く、め

- 衆寮前の版を鳴すと三下
- 巡廊鳴版のこと
- 最後に方丈前の鳴版三下
- 殿行法堂の鼓を打つと三
- 會、小參鼓と同じ、
- (齊鐘の時たらば格別な
- れども、巡版の次に特に
- 大鐘を打つにはあらず)
- 四、首座、堂衆、西堂、後堂は寮
- 前の版を聞きて威儀を整へ僧
- 堂に集り、暫く被位の牀邊に
- 立つこと

- 五、知事、諸寮衆、諸行者は巡
- 版を聞いて威儀を整へ庫司に
- 集りて立つこと
- 六、住持は鼓初めて鳴る時、装
- 儀して表方丈に出て椅に倚る
- 七、五侍者(燒香、請客、書狀、
- 衣鉢、湯藥)は住持に問訊し
- て、其左側に侍す、
- 八、燒香侍者は鼓の第一會の終
- る頃内陣の東側に往き、衆の
- 集れりや否やを候ふべし

●首座なり
●他の役も其
●一且は入り
●四方に布を
●茶の儀に任
●供するに任
●ありしに任
●適宜に任
●堂行と立知
●堂行の時知
●しと順列すべ

●此時堂行
●著座なり
●るべきなり

るど三度、直に大播となる、
首座以下一同左の順序にて方丈
を出て上殿す

▲堂行 — 首座 — 開口 — 住
知殿 — 五侍者 — 頭首 — 知

事 各々入堂して位に就く時、手磬
一聲、戒尺一打にて大播止る住
持進んで上香、献茶湯、普同三
拜、了つて椅子に倚る、
大衆も亦著座す

●此足斯く
●定まりたる
●やうに往序
●よくも往序
●まじり示す
●大過を此通
●順に是此通

の口頭に分布す」と云ふ
開口は、直に「天童の覺頌に云
く」と云ひ、頌を讀む、
頌の間に、首座は立ちて坐具を
收め、本則を捧げて、頭首位の
前を過ぎ、住持の後を過ぎて、
住持の正面に至り、一步横に運び
て真正面となりて揖す*
此間開口は大抵は頌を唱へ終り
て、最後の句を二度唱へ「作者
は、何々」自己の法問に云ふべ
き句を云ひて其まゝ黙す、首

維那般若心經を擧し大衆讀誦、
「心無罣碍」の處に至りたる時、
侍者立つて椅子の右側に進み、住
持より本則を受け取り、頭首位
の前を通り、首座の前におきて
直に歸位す、
首座は中啓を右の手に持ち、盆
袱のまゝ、擧げ、一旦下におきて
袱紗を徐に開き、之を捧げ居る
「般若心經」と結びたる時、
「擧す」と一喝して、本則を唱
へ、了りたる時、頌あり、開口

座は住持に揖したる後、又一步
左へ戻り、真直に住持の椅子の右
へ(住持の)往き、本則を還し、
又正面に往き展具三拜、住持は
合掌して拜を受く、
首座は坐具を其まゝ、東序に少し
向けるやうにして一拜、東序の
一同答拜す、(觸禮一拜)
又西序にも一拜、大衆答拜す、
次に又、正面に一拜して坐具を
收め、一步横に運びて、更に内
陣を廻り、本師位に展具三拜、

口圓鏡の起す事
佛事考に據りて
處に考起す事
たに述べて置く
て見よ、就き

なし、時の宜さに隨ふ、

其四、圓鏡調印式

圓鏡調印式は、毎年二月十日、及び八月十日に行ふを通例とす、即ち解制の前に當り、圓鏡を作りて之に調印し、其の確實なることを證するなり、古來には之無きとなれども、今は其必要なるを認め、下の如く儀式を定められたる也、其時刻は粥罷を以て定則とす、

【準備】燒香侍者預め結制の日、堂行の納めたる戒臘牌に據り、圓鏡を調認め、此日粥罷に住持に稟申し次に行者をして、副寺、維那、知客、首座に通報せしむ、
方丈に香花燭印肉を備ふ、
副寺等搭袈裟方丈に上る、
【調印】住持席に出て相揖して坐す、侍者正面に進み、圓鏡を開いて先づ住持の印を承け、香に薫じて諱名の下に押捺して印

*此期限中
たりとも己
に止る掛搭
を掛る處に
掛搭を請ふ
とを得ず

を返す、次に首座以下順次に印を承けて押捺すること前に同じ畢つて圓鏡を包み住持に呈して位に歸る、

【授與謝拜】時に首座香臺前に進み、住持圓鏡を香に薫じて首座に授與す、首座頂戴して懷中に納め、展具三拜、住持答拜せず、次に副寺、維那、知客に向つて、一拜、侍者に向つて一拜、又正面に一拜して具を收め、位に歸る、時に侍者は住持に茶を

供し、行者は首座副寺等と同く供す、一同喫茶し相揖して退く、

其五、新到挂搭法

【期間】新到の挂搭は二月十六日より四月三十日までと、八月十六日より、十月三十日までとを期限とす、
【新到到着】新到總門頭に於て威儀を肅整し、先づ衆寮に就きて客行に對して三拜、客行答拜して各々著坐、即ち懇慫に挂搭を

釋尊のとな
×覺王とは
●十五日に
○行ふを十三
日な爲す三
ふに豫めと
な

獲せしむ、佛の功德海は讚揚
し盡し難し、大日本國云云、
何山何寺、住持比丘某
本月十五日伏て覺王結制の辰
に値ふ、是れ釋子護生の日な
り、豫め此の日に於て楞嚴
勝會を啓建し海衆同音に秘密
神呪を誦誦す、冀ふ所は三寶
諸天齊しく衛護し、九旬の修
證難事無からんことを、右伏
て以れば、楞嚴勝會は本師釋
迦牟尼如來、寶光を無見頂相

より涌かし、舌相を大千沙界
に覆ひ十方の佛土を照して二
切の諸佛を集め無數恒沙の菩
薩をして二十五種の圓通を説
かしむ、獨り觀音菩薩の得處
を以て殊に聞聲悟道の表準と
爲す、遂に秘密神呪を演説し
て正に開悟の直道を單示した
まふ、楞嚴勝會は此の會より
肇まれり長期の誦呪は此の呪
を専らにす、日限を百日に約
し人數を什員に結ぶ、佛祖に

●南無楞嚴
の節及別打
指の法別今
指南又南無
は詳く説か
ず、又南無
楞嚴會上諸
善薩と云ふ
を佛菩薩と
はれども實
唱ふるを宜
しとす、教
用し規に備
示して斯く定
仍て斯く定
めらるるの
●意は引文の
緒解題の處
楞嚴咒の處
を見よ

九旬安居の舊規あり、叢林に
三月行道の勝會を建つ、謹
て疏
三寶證明維時曆年五月十三日、
諸天洞鑿維時曆年五月十三日、
何山何寺、住持比丘某甲、謹
て疏
宣疏終つて二侍者は柄爐と香合
とを收め、維那は元の處へ疏を
安き、位に歸る、
【聖號啓唱】堂行打磬、此時兩
班相揖して各々楞嚴會の圖に依
り徐に圖の通りの位に就く、堂

行打磬三聲、楞嚴頭、聖號を舉
す、文に曰く
●南無楞嚴會上佛菩薩
大衆合掌して之に和して曰く
楞嚴會上佛菩薩(三返)
次に楞嚴頭は、序引文を唱ふ、
爾時世尊、從肉髻中、涌百寶
光、光中涌出、千葉寶蓮、
有化如來、坐寶華中、頂放十
道、百寶光明、一々光明、皆
徧示現、十恆河沙、金剛密迹、
鞞山持杵、徧虛空界、大衆仰

七月一日、同十五日、八月一日の祝聖を修すべき時には、朝課の前に楞嚴會を修し、維那の普回向を、「巍々たる金相」云々の祝聖の回向となすべし、即ち楞嚴會を以て祝聖の儀を述ぶる也

三、楞嚴會滿散
楞嚴會滿散の行式は、大概啓建と同じ、今は再述せず、維那の宣疏の文は左の如し

妙湛總持不動尊、首楞嚴王世に希有なり、我が億劫顛倒の

想を銷し、僧祇を歴ずして法身を得せしむ、佛の功德海は讚揚し盡し難し、大日本國云何山何寺住持比丘某

本月十五日伏て、覺皇解制の辰に値ふ、是れ衆僧自恣の日なり、預め此の日に於て楞嚴會を滿散し、海衆同音に秘密神呪を誦誦す、集むる所の善利は、十方の三寶に回向し、護法の諸天に祝獻し、四恩三有に報答し、法界の有情を利

樂せん者なり、右伏て以れば、寶光を無見頂相より涌し、化佛の宣場有り、勝幢を室羅筏城に建て摩登の幻妄を銷す、昨は長期の安居に屬して此の勝會を啓さ、今は覺皇の解制に當つて各々法歳を圓かにす、知んぬ此の神呪力に乗じて、三惑頓に消し、忽ち此の呪心を明らかにす、十地速に登る情と無情と、同音に説法す能と所境と、互換主伴た

り常恆に佛事を爲し不退に法益を施す、外猷算無窮の山徳を重んじて風雨調適の惠祐を天下に加へ、内法輪不退の性海を轉じて、日月照耀の智光を群生に普うせん、謹んで疏

三寶證明維時曆年八月十三日、諸天洞鑿何山何寺住持比丘某謹て

それより、聖號啓唱、楞嚴咒行道、常の如く、終つて(摩訶梵の前に)楞嚴頭は、一人にて

左の咒尾の末章を誦す、
阿難、是の佛頂光聚、悉怛
多般怛羅、秘密伽陀微妙の章
句は、十方一切の諸佛を出生
す、十方の如來、此の咒心に
因つて無上正徧知覺を成する
を得、十方の如來此咒心を執
つて諸魔を降伏し諸の外道を
制す、十方の如來此咒心に乘
じて寶蓮華に坐し微塵國に應
ず十方の如來此咒心を持して
能く十方に於て摩頂授記す、

自果未だ成ぜざるに亦十方に
於て佛の授記を蒙る、十方の
如來此の咒心に依りて能く十
方に於て群苦を拔濟す、謂ゆ
る地獄、餓鬼、畜生、盲聾、
瘡癩、怨憎會苦愛別離苦、求
不得苦、五陰熾盛、大小諸横
同時に解脱す、賊難、兵難、
王難、獄難、風水火難、飢渴
貧窮念に應じて銷散す、十方
の如來此咒心に隨ひて能く十
方に於て善知識に事ふ、四威

△回向文は
啓建と同じ
文を用ふべ

口五月十三
日のこと

*此日の念
誦は免巡堂
とす

儀の中供養如意、恒沙如來の
會中推して大法王子と爲す、
十方の如來此咒心を行じて能
く十方に於て親因を攝受し、
諸の小乗をして秘密藏を聞い
て驚怖を生ぜざらしむ、十方
の如來此咒心を誦して無上覺
を成し菩提樹に坐し大涅槃に
入る、十方の如來此咒心を轉
じて滅度の後に於て佛法の事
を付し究竟住持し戒律を嚴淨
して悉く清淨なるを得せし

ひ右の文を誦了つて、摩訶梵
を擧し、大衆之に和す、
維那回向、普同三拜散堂、
其二、衆寮諷經
楞嚴會啓建に引續き、同じ十三
日に行ふ晡時衆寮諷經のと、序
なれば、此に述べ置くべし
【準備】知客豫め、衆寮の聖僧
前に香、花、燈、燭、茶、菓、
湯を辨備す、晡時に至りて、僧
堂念誦終りたる時、客行、衆寮

○此回向規
は依りたる
常の也、通
啓建、滿院
に此、向散
は此、向散
用ひて、向
との指、南
×此、知、客
茶湯は、知、客
供す、る、な

前の版を鳴すと一通、
【入寮】首座衆を率ゐて入寮し
看讀位に就く
知客は寮門の外右方に立つて住
持を接迎す、
住持入寮、聖僧前に問訊、進ん
て焼香、献茶湯、×知客遮供す、
堂行手磨を鳴し普同展具三拜、
住持又進んで焼香し位に歸る、
【聖號及諷經】維那聖號「南無
楞嚴會上佛菩薩」を擧す
以下楞嚴咒にて行道、次に摩訶

梵、畢つて回向に曰く。
妙湛總持不動尊、首楞嚴王世
に希有なり、我が億劫顛倒の
想を銷して、僧祇を歴ずして
法身を獲せしむ、上來大佛頂
萬行首楞嚴陀羅尼を諷誦する
功德は眞如實際に回向し無上
佛果菩提を莊嚴す、護法の諸
天、三界の萬靈、十方の至聖、
日本國內大小の神祇、當山の
土地護伽藍神、招寶七郎大權
修利菩薩合堂の眞宰、威光を

◎之等は行
者が爲す役
なりしなり

増加せる無量の徳海に祝献
す、冀ふ所は山門繁昌僧寶
増々盛に諸檀福壽快樂圓滿、
諸緣成就同じく種智を圓にせ
んことを
十方三世了つて普同三拜、大衆
散堂、知客は先づ寮門外に出て
て住持を送るべし
其三、土地堂念誦

【緒言】土地堂念誦とは、土地
神に對して、結制の初には、結
制中の加護を願望し、解制の時
には結制の終了まで此地の安か
りしとを謝し、猶此上にも利益
あらんとを願望する儀式なり、
古來は紙錢紙馬を燒き當日の供
物を撤去して、之を清淨の地に
埋めたる儀式あり、猶、銀錢を
燒き、住持、土地の茶を傾瀉け、
大悲咒を讀む等のとあり、元來
紙錢のとは支那にて鬼に供養す
る時の儀式に用ひたるものなれ
ば日本の「繪馬」と同様、一概

●焚燒經像
一は五逆の隨
山一なりと面
は戒めたる

に排斥すべきにもあらざるべけれど、其地の習慣を強ひて固守するにも及ばざるべし、習慣ある處は、用ひてよし、習慣なき處は用ひぬが可し、但し心經を堂の柱にかけ、之をも焼くやうの記事、舊記にあり、經を焼くは悪し、紙錢のみ焼くべしとなり、土地堂念誦は左の時に行ふ
二月十四日晡時（冬解制）
五月十四日全（夏結制）
八月十四日全（夏解制）

十一月十四日全（冬結制）
十二月三十一日（除夜）
今は二月十四日の冬の解制の分を詳説し、其他は附記すべし、
【準備】知殿は豫め、土地前に念誦文、華、燼、燭、茶、菓、湯を準備す
晡時に至つて、堂行は諸堂の香燭辨整ひたるを點檢して巡版鐘司大鐘を鳴す
（總て三八念誦と同じ）
大衆は土地前に集り、東西に鴈

▲出班燒香
のと後にあ
り、参照せ
よ、
▲自香を用
ひぬ故に侍
者は香合の
蓋に香を分
けおくなり

立し、兩序分班すると
【住持巡堂】住持は三八念誦と同じく巡堂し、最後に土地堂に至る、住持の土地堂に近くを見て殿行小鐘を鳴すと七下
住持土地前に到る、兩序大衆齊しく揖す、住持進んで燒香次に献茶湯了つて位に歸る
【出班燒香】殿行、鉞を持ち、鉞唇を捺すると三聲、
維那班を離れて爐火を檢し、卓の左邊に土地を背にして立つ

殿行又鉞唇を捺すると三聲、
維那住持を揖請す、
住持進んで燒香、（此間殿行は鉞を鳴すと「出班燒香」と同じく五聲なり）位に歸る、
請客侍者は、此時香合を開き、其蓋を仰向けて香を兩方に分ちおくべし
以下兩序の出班燒香、維那の揖請、鉞の五聲、皆「出班燒香」と同じ、但し、兩序出班の時には中途にて身を右に轉じ、二

口此時の借
香問訊の焼
香問訊の焼
通問訊の焼
香問訊の焼
者あり、過
は混交の之
なり、班の香
の出し、香
に非用、香
注意すべし

* 青帝とは
春の神なり
尙書緯に曰
く春は東帝
と云ふ、又
青帝と云ふ
云々、之に
基く、之に
×梵苑と
指す、之を

◎二月は淫
樂會の月な
れ、誦するな
を誦す、地堂
念誦に附し
行ふには非
ず、夏風と
● 燕風とは
夏の風、炎
帝とは夏の
神なり、音
△ 哀は音ホ
ウ、又は音
詩經に出づ
あつむ、お
ほし、等の訓
あり、秋の
▲ 金風は秋
風の事、秋
白帝は秋の
神なり

人打揃ひて住持に問訊（即ち借
香問訊なり）し、又歸位の時に
も同じ處にて問訊す（即ち謝香
問訊なり）失念すべからず
最後に維那焼香して位に歸り、
又進んで念誦文を把り、香に薰
じて携へて位に歸り、念誦す、
其文左の如し
切に以れば、春風野に扇ぎ、
青帝方を司る、覺皇解制の辰
に當る、是れ法歳周圓の日な
り、九旬難無く一衆咸く安

大衆同音に、「十方三世云々」そ
れより、首座は衆を率ゐて法堂
に登り、「遺教經」を讀誦するな
り、
【五月の念誦】行式は二月に同
じ、念誦を左の通り定む、
切に以んみれば、薰風野に扇
ぎ、炎帝方を司る、法王禁足
の辰に當る、是れ釋子護生の
日なり、躬んで大衆を哀め、
靈祠に肅詣して、萬徳の洪名
を誦持し、合堂の眞宰に回向

し、萬徳の洪名を誦持し、仰
いて合堂の眞宰に報ず、仰い
て尊衆を憑んで、長聲に念ず
大衆同音に十佛名を唱ふ、其様
式、凡て三八念誦と同じ、
回向に云く
上來念誦する功德は並び用ひ
て、護持正法土地龍神に回向
す、伏して願はくは、神光協
賛して有利の勳を發揮し、梵
苑興隆して永く無私の慶を錫
はらんとを、

す、祈る所は加護して安居を
遂ぐるを得ん、仰いて尊衆
を憑んで長聲に念ず、
大衆同音十佛名回向文等如前
【八月の念誦】念誦文左の如し
切に以んみれば、金風野に扇
ぎ、白帝方を司る、覺皇解制
の辰に當る、是れ法歳周圓の
日なり、九旬難無く、一衆咸
く安し、萬徳の洪名を誦持し
て仰いて合堂の眞宰に報ず、
仰いて尊衆を憑んで長聲に念

口古規に禮の種は
人事行禮に
時季に異説あり
り多し
故に違ふ
なり今定む
なく確せ
は冬至りに
人事あり
廢せども
*記憶す
み方等をは
考の時を
堂の進上

ず

【十一月の念誦】念誦文左に
切に以んみれば、北風野に扇
ぎ、玄帝方を司る、法王禁足
の辰に當る是れ釋子護生の日
なり、躬んで大衆を哀め、靈
祠に肅詣して萬徳の洪名を誦
持し、合堂の眞幸に回向す、
祈る所は加護して安居を遂ぐ
るとを得ん、仰いて尊衆を憑

第三、行禮

んで長聲に念ず

【十二月除夜】念誦文に曰く
化工密に運び、歳曆之に周る、
咸く四序の安を欣び、將に
三元の慶を啓かんとす、躬ん
て大衆を哀め、靈祠に肅詣し
て萬徳の洪名を誦持し、合堂
の眞幸に回向す、仰いて尊衆
を憑んで長聲に念ず、

其一、人事行禮

人事行禮は左の時に行ふこと口

- 一月一日(歳旦)
 - 二月十五日(解制)
 - 五月十五日(結制)
 - 八月十五日(解制)
 - 十一月十五日(結制)
- 一、元旦人事
元旦の朝課諷經、鎮守諷經、課
罷小參の後直に人事行禮をな
す、

【西堂人事】西堂先づ香臺前に

進み、胡跪して自身の袖より香
を出して焼香、一步退きて觸禮
三拜、住持答一拜、西堂歸位
【知事人事】次に知事は直歳よ
り班を引きて香臺の前に立列し
上首一名進んで胡跪し、袖裡の
香を焼き列に歸る、此時知事位
の者一同坐具を展べて將に禮拜
せんとす、住持は右の手にて「そ
れには及ばぬ」と云ふ態度、即
ち手を仰向けて下より上に徐に

△之を免停
の勢をなす
と稱す

△嘉徳の驚
は喜ぶ義な
り俗に「お
めでたう」
と云ふなり
◎致語は一
同が同音に
云ふを正式
とす、さる
ど、多きは
場合、人に
首合、人な
云ふ、紛交
りを恐る、
な

上げるなり、△知事は禮拜すると
を止めて坐具を收め又手して直
に左の語を述べ、
此日改歳の令辰、謹んで嘉徳
の儀を伸ぶ、
之にて又坐具を展開し、再び三
拜せんとす、住持又免停の勢を
爲す、依て直に
即日氣雲極めて寒し、恭く
惟れば、堂頭和尚尊候起居萬
福と唱へ了つて觸禮三拜（東
序の大衆此時皆北面して知事

と同時に觸禮三拜す）住持答
一拜、
右畢つて知事の上首班を引いて
位に歸る。
【頭首人事】次に首座より班を
引きて香臺前に立列、首座は進
んで胡跪焼香、列に歸り、以下
知事と同じ、觸禮三拜の時頭首
一同觸禮三拜、住持答一拜頭首
の末位班を引いて歸位す
【兩班出堂】右畢る時、知事
は揖して位を離れ、庫司に向ふ、

●法眷ある
時のことを示
しおく、西
堂法眷はな
べき時もある
べし

次に首座大衆齊く揖して位を離
れ、同じく庫司に向ふ
【侍者人事】大衆、出堂了れ
ば、五侍者は末位より班を引い
て香臺前に立列、焼香侍者進ん
て袖裡の香を焼ぎ列に歸りて全
班展具三拜す、住持は答一拜す、
焼香侍者班を引いて歸位す、(致
語はなき也)
【法眷人事】法眷ある時は、侍
者人事の次に人事を行ふ、其行
禮は總て侍者人事と同じ、

【行者徒弟沙彌人事】次に行者
徒弟、沙彌、末位より引いて香
臺前に立列、上首一名香を焼ぎ
展具九拜す、住持答拜なし、
之にて人事は終りたれば、住持
は暫く曲楳に倚り、僧堂前の七
下鐘の鳴るを待つこと
【大衆と知事と陳賀】右の侍者
人事の始まる前に、法堂を出て
たる六知事は、直に庫司に到り
て、主位に就くなり、次に位を
離れたる首座以下大衆は、首座

●知事と頭
首の己の職能
を自覚しての
間、違へぬや
に、文句なし
に、違ひなれ
ば、問違ひ易
きものなり

●「望むら
くは」と云
ふとあり、
語法に違へ
り、されど、
記すの爲め

口巾瓶とは
住持の傍と
云ふほどの
職なり、
△此日は再
中が故に堂
若しは上堂
若しは上堂
諷經のばに
小参あり、
小参あり、
別席改め、
準備する要
な西堂人事
ある二、月
に特考の爲
に記す

同じ致語に相違あり初展に曰く
伏して喜ぶ法歳周圓諸の難
事無し、此れ蓋し和尚法力の
蔭庇なり、下情感激の至に任
ふると無し
住持答詞に曰く

此者、法歳周圓、皆知事等法
力相資るを謝す、感激の至り
に任へず
再展に曰く
即日氣雲猶寒し恭し惟れ
ば堂頭和尚尊侯起居萬福

つて出堂、露地手磨前の如し
【方丈内人事】知事頭首上方
丈、展具三拜、住持答一拜、喫
茶して退く

三、五月十五日人事
五月十五日には後夜坐禪、楞嚴
會、朝課諷經、鎮守諷經の後、
住持座具を收めて直に南面す、
殿行拜席を卷き、住持の前に香
臺を置き後に曲椽を据ゆ、(侍者
行者は内陣の東側に立つべし)
【西堂人事】一月一日と同じ

◎【頭首人事】兩展三禮、致語は
知事と同じ、知事とあるを頭首
と改むるのみ、次の侍者行者等
の人事、庫司にての知事大衆の
人事、僧堂にての人事行禮、進退
總て一月一日に異なるとなし、
住持巡堂一匝して出堂の後、堂
行手磨一鳴す、首座、大衆は又
手して同音に唱へて曰く
九旬相依る三業不善、大衆を
惱亂す伏して望む慈悲
手磨に従つて普同展具三拜、了

【知事人事】作法前と同じ、初
展に曰く
此際安居禁足、巾瓶に奉する
とを獲たり、惟、和尚法力の
資持に依つて願くは難事無か
らんとを
住持答へて曰く

之に多幸、安居を同うすると
を得たり、亦、冀くは、知
事等法力相資けて諸の難事無
からんことを、
再展に云く

身三業の口業は、口を以てして、妄言、綺語、兩舌、惡口、無益の語、此の五事、身業は、殺生、盜、淫、妄、此の四事、心業は、貪、瞋、癡、慢、此の四事、此の十二事、三業の根、此の十二事、改望記は、斯の苦、文に、日、甚、もの、む、業、身、三、業、の、口、業、は、口、を、以、て、し、て、妄、言、綺、語、兩、舌、惡、口、無、益、の、語、此、の、五、事、身、業、は、殺、生、盜、淫、妄、此、の、四、事、心、業、は、貪、瞋、癡、慢、此、の、四、事、此、の、十、二、事、三、業、の、根、此、の、十、二、事、改、望、記、は、斯、の、苦、

即日氣雲漸く熱し、恭しく惟
れば堂頭和尚尊候起居萬福
【頭首人事】作法一月一日と同
じ、住持の答が前に知事とある
を、頭首と變更さるゝのみなり
【僧堂人事】頭首人事以下僧堂
人事まで一月一日と同様の事、
唯だ住持が巡堂一匝して出堂し
たる後、堂行手磬一鳴し首座大
衆は又手同音にて唱へて曰く
此際幸に安居を同うす恐く
は三業不善、且望むらくは慈

悲
手磬に従つて普同展具三拜出堂
【方丈内人事】知事、頭首は上
方丈展具三拜、住持答一拜、喫
茶して退くと元旦と同じ、
四、八月十五日人事
至く二月十五日と同じ致語左の
如し
（初展の分は同じ）再展に曰く
即日氣雲猶ほ熱し、恭しく惟
れば、堂頭和尚尊候起居萬福
五、十一月十五日人事

心得置くべ
◎持者隨行
の時請客侍
合は香燭香
●茲に衆と
云ふは庫司
寮の衆を云
ふなり
△寮の門と
其寮の入口
を云ふ

五月十五日と同じ致語再展は左
の如し
即日氣雲漸く寒し（以下同じ）
其二、巡察
【緒言】五月十五日と、十一月
十五日とに住持巡察す、時は
粥罷なり、今は五月の順序を述
ぶべし
【準備】粥前に侍者住持に上申
して、僧堂前に巡察牌を挂く、
行粥畢つて、諸寮皆、住持

の座位、香、花、茶（又は湯）を
設け、各々威儀を具して巡察を
俟つ、粥罷少頃して侍者住持の
意を承け、方丈前に鳴版三下、
住持方丈を出づ、侍者行者隨
ふ。
【庫司巡察並に致語】時に庫司
は行者をして、庫司寮前に鳴版
三下せしめ、衆を集め寮前に田
で、寮門の方に向つて列立し住
持を接迎す、住持入寮、座に著
く、知事衆僧隨ひ入つて坐して

◎齋罷行鉢
の點を引續き
煎の心を終り
本あり終り
に見よ

●茶勝人の用
紙は糊法に等
別には指す南
及ばず

△可漏は五分は
九寸五分は
横二寸五分
中二寸五分
は朱紙を角
ふらるる用

▲特爲の北位
は後門の北
類は上持版
即ち住持處
相對せらる
相対せらる
なり茶位と
特爲茶位と
て別を定め
照牌を定め
たはれども
今は特爲の
略は凡て平
外は凡て平
常の鉢に用
其まゝと定
めらるる

の文を書きて可漏に盛れ、盆袱
にして、袈裟を掛け、首座寮に
赴き、首座を請すべし。

堂頭和尚今晨齋退就ニ
雲堂一點茶特爲ニ
首座大衆一聊表ニ
改歲陳賀之儀一乃請
諸知事同垂ニ
光伴
一月一日 請客比丘某敬白

(可漏は左の通り書くべし)

して、請客侍者は退出、首座之
を送る、
【點茶牌】首座は侍者を送りた
る後、前の茶勝を開封し、弁事
をして、僧堂前上間の版上に貼
付せしむ、
請客侍者は僧堂に點茶牌を掛く
【準備】齋罷に至り、侍者は行
者をして僧堂内に特爲の位を設
けしむると、
香、花、爐、燭、及び行茶の具を
準備すると

狀請首座大衆

請客比丘謹封

【請禮】請客侍者首座寮に往け
ば、首座は香臺を便宜の處に出
し、袈裟を掛けて之を接待す、
侍者は進んで茶勝を香に薫じ、
首座に呈する様子を示して香臺
の側に置き、請する語に曰く
堂頭和尚今晨齋退、雲堂に就
いて特爲點茶、伏して望む降
重
云ひ了つて觸禮一拜、首座答拜

【茶鼓】準備整ひたる時、住持
に上申して茶鼓を鳴すと一會大
衆は袈裟を掛けて、入堂し、鉢
位に立つ
【請特爲人】侍者は外堂に在り
て大衆の悉く位に就くを待つて
入堂し、聖龍の後より首座の前
に至り、首座を揖して、位を離
れしむると
次に書記を揖して版首に進まし
むること
右了つて首座を引きて特爲の位

口特爲人と
は、前爲の首
座を特爲位
に、前したれ
ば、之を特
爲人と云ふ
なり、以下
其通し、心
得べし、

に就かしむ、
問訊して堂外に出て、住持を祇
候す

【住持入堂】茶頭行者、堂前の

小鐘を鳴すと七下、

住持入堂、侍者住持を迎ふ

住持聖僧に問訊して位に就く

【著坐問訊】侍者入堂して先づ

聖僧に問訊し、龍後より往きて

特爲人の前に問訊し、身を轉じ

て住持の前に問訊し、次に首座

版より巡問訊一匝して外堂に出

て、下間より上間に巡り、又入
堂、中央にて問訊す

此時特爲人と住持とは椅に著き

大衆は牀に上りて坐す、

【四處の問訊】行者は上下間と

外堂の正中とに香臺を出す

侍者は、先づ聖僧の香合を取り、

直に焼香問訊し、次に上間の香

臺に焼香問訊、次に下間の香臺

に焼香問訊、次に外堂の香臺に

て焼香問訊す、

【行茶問訊】侍者四處問訊終つ

て堂に入り、香合を元の處へ安
き、中央に歸りて深く問訊す

【行茶】行茶問訊の次に茶頭は

堂前の鐘を鳴すと二聲す、

行者は、特爲人と住持との前に

蓋を行き、次に大衆の蓋を行き

引續き茶を注ぎ行く

【勸茶問訊】一堂の茶既に行渡

りたるを見て、侍者は堂に入り

正面に深く問訊す

之れに一同茶を喫する也

【謝茶問訊】再進の後一同喫し

了りたるを見、侍者は堂に入り、
先づ、特爲人の前に到りて問訊

し左に身を轉じて、聖僧の前に

て大展三拜、坐具を收む、

又龍後を経て住持の前に問訊し

首座版より上下間外堂に到るま

て巡問訊一匝し、中に歸りて深

く問訊す、

行者は先づ特爲人と、住持との

蓋を收づくべし

【謝茶致語】特爲人は位を起ち

て住持の前に至り立つ、住持も

茶を二度は
くを二度ひ

光伴香とは、聖僧の光伴を謝する爲に焼く香なり、焼くに云ふ「オシヤウバ」を謝する也

◎月日を改むるとは、勿論なり

●月日を改むると亦同
△以上は特
に煎點する
法なれども
齋能行鉢よ
り引續き行
ふ時もあれ
ば、其下手
に記す

亦椅を下りて相對して立つ
兩展三禮、人事行禮の時の如し
初展に曰く

茲に特に煎點を蒙る、下情感
激の至りに堪へず

再展に云く
即日氣雲極めて寒し、恭しく
惟んみれば、堂頭和尚尊侯、
起居萬福

觸禮三拜、住持答一拜、
特爲人は身を轉じ、龕の後を過
りて出堂歸寮す、侍者は揖して

【十一月の特爲茶】呈勝の「結
制」は五月と同じく、致語には
「氣雲漸く寒し」と改むべし

【齋時行鉢罷の煎點法】若し、
便宜上齋時行鉢の後直に此の煎
點を行ふ時は左の如く心得べし

- 一、處世界梵將に終らんとする
時茶鼓一通を打す
- 二、大衆は鳴鼓を聞き、座を起
たずして鉢を左肩の背後に安
き、黙つて坐り居る
- 三、首座、書記の兩名は牀を下

見送るなり

【光伴香】侍者又入堂して、聖
僧前に香を焼き退いて深く問訊
時に鳴鐘一下、大衆の蓋を收め
次に鳴鼓三下

住持、大衆、順次に
右にて特爲茶作法終る

【五月の特爲茶】行式は一月に
同じ、茶勝の中、「改歲陳賀」
の四字を「結制」と改め、首座
の致語の中「即日」の下「氣雲
漸く熱し」と改むるのみ

りて立ち居ると

四、侍者入堂して首座を揖して
位を離れしめ、書記を版首に
進め、次に首座を特爲位に就
かしめ、問訊し、身を轉して
書記の前に往き問訊し、巡堂
せず、直に聖僧前に歸り問
訊す

五、特爲人と書記とは牀に上り
て坐に著く、此時行者上間、
下間、外堂とへ香臺を出す、
其餘は本文の通りのと、

△勝は前にある茶勝と紙一枚に書き、可漏は長き九寸五分、横二寸五分、朱紙を用ふ

其四、特爲湯法

【緒言】特爲湯を行ふは、左の二期とす

二期とす

○五月十四日 ○十一月十四日

之は庫司が、首座と大衆とに結制の儀を表する爲、特に湯を差上げる云ふ儀式なり

【點湯勝】其月の十二日に認むべき點湯勝は左の如し

庫司今晚就ニ
雲堂「點湯特爲ニ

白庫司行者のふて庫行と云

内便宜の處に香臺を出し、塔架裝にて應接す、庫司行者、進んで湯勝を香に薫じ、首座に呈納る勢を見せて香臺の側に置き、庫司今晚、雲堂に就いて特爲點湯、伏して望む、慈悲光降と謂ひて觸禮一拜、首座答拜、庫行の出て往くを送り、勝を開封して辨事に、外堂下間の版上に貼附せしむ、

【住持請禮】知事の上首は方丈に詣して香を燒き、展具三拜

首座大衆「聊表ニ
結制之儀「伏望
衆慈同垂ニ
光降

月日庫司比丘某等敬白

(可漏は左の如く書す)

狀請首座大衆

庫司比丘某等謹封

【請禮】十四日齋罷に庫司行者湯勝を盈袂にし搭架裝にて聲け持ち首座寮に趣く、首座は、寮

今晚雲堂に就いて首座大衆に特爲するの點湯、伏して望む和尚慈悲特に降重を垂れ玉へと請し了つて歸寮し、行者をして僧堂に點湯牌を掛けしむ

【準備】晡時土地堂念誦の前に至り茶頭は行者に命じて僧堂内に特爲位を設け、其他香臺等の準備、一月一日と同様にせしむるを要す

【入堂】土地堂念誦終る時、茶頭行者茶鼓を鳴すこと一會

待つと、別
に記しあり

此の巡堂
の法三念
誦の巡堂
同の巡堂
△は方丈
住持の立
就各々を
如く自位
堂之と常
り堂は了
な巡

僧堂に到り、先づ露地の念誦位
に立つ、西堂は首座と對面して
立つ、次に首座揖して入堂す、
西堂は挾入して首座に次ぐ、同
じく聖僧前に問訊し、首座は龜
後を経て位に就き、西堂は直に
左に轉身して位に就く、
次に第二座より順に入り、巡堂
して位に就く、侍者は衆の後に
隨つて入り、半堂を巡つて、龜
後に止まり、龜を背にして立つ、
【住持巡堂】時に茶頭行者、堂

前の小鐘を七下す、住持入堂、
聖僧前に問訊焼香し、上間より
下間へ巡堂一匝し、位に就いて
立つ、次に知事入堂、聖僧前に
排列して問訊し、身を轉じて龜
後より住持の前に到つて問訊し
首座版より巡堂一匝し、堂を出
て、位に就く、侍者は龜後より
知事の後に隨つて出堂す、
【著座問訊】右の巡堂了りたる
を見て焼香侍者直に入堂し、正
面に立ちて深く問訊して退く、

口侍者外
は預め東
上間の立
住持の出
を祇候し
隨從す

住持椅に着き、大衆上牀して
坐す、時に行者上下間と、外堂
の正中とへ香臺を出す、
【行茶問訊】焼香侍者、進んで
聖僧前に香合を把り、先づ聖僧
に香を焼いて問訊し、次に上間、
次に下間、次に外堂、各々香を
焼き問訊す、畢つて堂に入り、
香合を元の處に安さて歸中し、
深く問訊す、行者小鐘を二下す、
先づ盞を行き次に指申茶を行く
【勸茶問訊】内外堂に茶を行く

こと遍きを見て、焼香侍者入堂、
深く問訊す、衆同く喫茶菓す、
行者再び茶を行く、
【謝茶問訊】衆の喫し盡すを見
て、焼香侍者入堂、正面に深く
問訊す、行者鳴鐘一下、盞を收
め、次に上下間外堂の香臺を收
む、時に鳴鼓三下、
【住持出堂】住持椅を下り、大
衆同時に下牀して低頭す、住持
正面に問訊して出堂歸方丈、口首
座大衆次第に出堂、

口方三あ宣等若×日三云れ月*
宣著丈下らす大く若等十ふばに晦
す坐の住ばべ衆はしな日な末大日
べし後持鳴きに知西リ卅リ日小と
して再歸鼓事口事堂 一、をあは

【内禮】次に知事頭首上方丈
焼香三拜、住持答一拜、喫茶退出
（庫堂行者は僧堂の鳴鼓三下を
聞いて長版を打つと常の如し）

其六、夜參行茶

【緒言】夜參行茶とは毎月十四
日と晦日とに昏鐘後に行ふ、

【準備】茶頭行者豫め、茶堂
に行茶の準備を爲す

昏鐘罷茶鼓を鳴すこと一會、
【茶堂】大衆掛絡にて茶堂に赴

き、行茶位に就く、侍者住持を
請して出づ、普同相揖して著座
す、侍者住持に茶を供し、行者
大衆に茶を行く、遍うして衆同
じく喫茶、行者再び茶を行く、
一同喫了れば、侍者住持の盞
を收め、行者大衆の盞を收む、
【口宣】この時住持垂誡口宣あ
らば大衆少く低頭して謹聽すべ
し、口宣了つて鳴鼓三下相揖し
て散堂、
知事頭首は方丈に上り徐話退出

第八編 特殊法式

第一、轉讀大般若法

【準備】須彌の正面に、般若會
の像（俗に十六善神）を掛け、
香、華、燈、燭、茶、菓を備へ
前卓の上には、拈爐、華皿、酒
水器をもくと
六百軸の大般若經を、僧侶の數
に應じて經卓の上又は函のまゝ、
分配し、第一卷を維那の卓上、
第六百卷を住持の卓上に置く、

住持の卓には、別に、華、爐、
燭、及び理趣分と鈴とを備ふ
【入堂、淨道場】時至つて鳴鐘
大衆法堂に集る、
住持入堂、上香して揖する時、
堂行手磐を鳴らすと一通、普同
三拜、
住持は進んで焼香、直に献茶湯
行式、普通の献供の如し

口小座を住す客口
多卓梅を用持る殿小
しをのひに時に院
お前ずははて修
くに、持、修

ん来一編じのなて實ら十じ *
を切かて實さ以華ん方て華
と供諸ら十華んて帳散衆偏殿
調養のし方を帳散衆偏殿
ずせ如めに散衆とじのかす

畢つて揖する時、堂行大磨を打
住持退いて椅に就く
堂行小磨二聲、大衆著座
【浄道場】浄道場の者三名坐
具を收めて立ち、同時に前卓の
前に進み、問訊して、柄爐、華
皿、洒水器を執り、一步下つて
並び立つ
堂行大磨三聲
維那浄道場の偈第一句を擧す
*散華莊嚴偏十方○磬子
散衆寶華以爲帳(大衆同音)

散衆寶華偏十方(全)
供養一切諸如來(全)
第二句より、大同衆音に誦す
浄道場の者右に身を轉じて、
香を焼き、花を散じ、水を洒ぎ
て、緩かに遠堂一匝す、其時の
約束に依り、二唱又は三唱し、
最後の偈の「諸如來」の時に繞
り終りて前卓の前に歸り、三人
は各器を元の所へおさ、問訊し
て位に歸り著坐す、
【宣疏】若し疏を宣讀する時は

△盤山清規に於て、
經有之、疏讀する時、
記有之、疏讀する時、
銀錢有之、疏讀する時、
の指其用あり、
今日に於ては、
尋常の儀に於ては、
若し會に於ては、
此の止めに於ては、
向文の疏讀する時、
者其の疏讀する時、
示す其の疏讀する時、
但し其の疏讀する時、
三用ひ其の疏讀する時、
元用ひ其の疏讀する時、
般若の疏讀する時、
めらるるの疏讀する時、
取らるるの疏讀する時、
ふべしと爲す、
取らるるの疏讀する時、
ふべしと爲す、

此所に於て、維那、疏を把り、
宣讀し、住持は常の如く胡跪し
て柄爐を捧ぐべし、疏に云く
總持は猶ほ妙藥の如し、能く
衆の惑病を療す、亦天の甘露
の如し、服する者は常に安樂
なり
仰ぎ冀くは三寶、俯して照
鑑を垂れ玉へ
大日本某縣某州某町村某山
某寺住持比丘某甲等
特に三寶の境界に祈誓し、專

ら三業の白善を修習して、茲
に六和敬の淨侶を供養し、六
百軸の金文を轉讀し奉る、薩
埵波倫の極信心を覺し、廣大
般若の功德力を仰ぐ、集る所
の鴻福は、般若十六會の一切
三寶、極安樂世界等の十方三
寶、本尊界會觀自在尊二十八
部衆、并に信心の施主某甲等
の本命元辰一切の星宿十六
善神等護法の諸天、三界の萬
靈、日本國內大小の神祇、合

云其任は云、其の文、但に取捨
を載せ、宣讀の、みし
其の指、不定、其の
處を、思ふ、其の
なると、思ふ、其の
人、あり、思ふ、其の
ひ、あり、思ふ、其の
お、あり、思ふ、其の
宣、あり、思ふ、其の
座、あり、思ふ、其の
華、あり、思ふ、其の
開、あり、思ふ、其の
宣、あり、思ふ、其の
起、あり、思ふ、其の
終、あり、思ふ、其の
具、あり、思ふ、其の
著、あり、思ふ、其の
可、あり、思ふ、其の
も、あり、思ふ、其の
坐、あり、思ふ、其の
座、あり、思ふ、其の
後、あり、思ふ、其の
出、あり、思ふ、其の
名、あり、思ふ、其の
出、あり、思ふ、其の
名、あり、思ふ、其の

堂の眞幸に回向す、各々威光
を増加し、衆生を利濟して入
道せしむる者なり、右伏して
以れば總持の明咒は能く一
切の災難を除き、般若の智火
は速に無量の煩惱を焼く、久
しく金剛不壞の壽命を持つて
福慧を増長し、遠く八萬四千
の塵勞を離れて、業苦を消滅
す、身心快樂にして諸緣吉慶
ならんとを、謹んで疏。
【心經讀誦】大磬三聲、維那般

若心經を擧す、大衆同誦三卷、
其間に住持は理趣分を讀み始む
べし、次に其作法を記す、
【理趣分讀誦】住持は心經の初
と同時に「理趣分」を香に薫じ
合掌頂戴し、先づ帙を脱して、
傍に置き、經を執り、卷首の
十六善神の圖を開きて眼上に鞏
げ善神の名號を唱ふると三返、
次に「十六神王咒」を讀誦し、
次に振鈴三回して經文を讀み始
む、「一切如來の大覺最勝成就

口二八部
衆とは十八
普賢菩薩
婆伽婆
辨功徳を
下神王云
ふの徳を
●を、若し
名、若し
主、若し
十、若し
又、若し
那、若し
清、若し
堂、若し
命、若し
廣、若し
し、若し
年、若し
山、若し
比、若し
て、若し
り、若し

すれば大菩薩をして降伏一切大
魔最勝成就せしむ、降伏一切
大魔最勝成就すれば大菩薩を
して普大三界自在最勝成就せ
しむの處にては、勵聲に讀誦
し、最後の陀羅尼「納慕薄伽後
帝云々」の處にて振鈴三回、看
讀し了つて轉翻すると七返、次
に第六百卷を轉翻す、作法後に
明かなり
【轉讀】大衆は住持の理趣分に
は拘らず心經を誦し、第三遍目

に至り、堂行小磬二聲すれば、
大衆合掌して自身の前にある大
般若經の中の第一帙（普通は右
の端にあるもの）を解き其第一
卷を取りて懇懃に頂く、心經の
終る時大磬一鳴
大衆「大般若波羅密多經卷第何
百何十」と、特に「大」に力を入
れ大音激發して魔類を警動する
勢ひあるべし
經の表紙を開き、其の初を看讀
すると七行、先づ右へ三返、左

(誦咒三返の間になすべし)

大磬一鳴、又轉讀すると前の如くし、最後まで此の通りなす、最後に、一卷のみ残りたる時、堂行は小磬を鳴すと二聲(之は住持に、轉讀の終りを報ずる也)大衆は最後の一卷を捧げて、大磬の鳴るを待つ
大磬一鳴すれば、住持は第六百卷を把り、大衆一同、最後の一卷を轉讀し、住持は勵聲に
大般若波羅密多經卷第六百、

降伏一切大魔最勝成就

と唱へ、大衆は經を收む
堂行、大磬一鳴、維那、經を擧す(觀音經、金剛經、大悲咒、消災咒等)誦經終つて回向、其文に云く、
總持は猶妙藥の如し、復く衆の惑病を療す、亦、天の甘露の如し、服する者常に安樂なり
り仰ぎ冀くは、三寶俯して照鑑を垂れ玉へ、上來大般若波羅密多經六百軸の金文を轉

此回向は諸回向清規に出たり

法涌、常啼菩薩等六神の下を見

讀し、消災妙吉祥陀羅尼を諷誦す、集むる所の功徳は、般若會上諸佛菩薩及び十六善神一切護法の諸天、日本國內大小の神祇、當山土地合堂の眞宰、威光を増加せる無量の徳海に回向す、祈る所は、今上皇帝聖壽萬安、文武百僚鈞算長久、十方の檀那福慧增長、山門繁榮、火盜潛消、海衆安穩、諸緣吉祥ならんと

右の回向了つて、普同三拜して三拜す、

【疏ある時の回向】若し疏ある時は更に簡單なる回向文を用ふるも宜しかるべし、左に舊來用ひたる一例を掲ぐ
上來大般若波羅密多經を轉讀し何々經を諷誦す、唯願はくは、教主釋迦牟尼如來、千佛善逝十六會中般若妙典、法涌、常啼一切菩薩、身心善告一切賢主、般若守護十六善神般若

△を較も述あ多此退故も山他をに忌にをは*可挿は願繁平×
 主付し、べり少の法畧今を住寺勿三、ふ時班りす此旨等、し當
 人すて多ず一の法畧今を住寺勿三、論佛二も々焼る處あの内
 のべ註少と々異に叙其行等の開其之會祖の之香もにら祈

威光哀愍納受、×心中の所願
 成就圓滿、乃至法界平等利益

第二 出班焼香法附迎眞送眞、特爲湯法

【準備】一、知殿、豫め、前卓の香爐の右へ柄爐、小香合、左へ「疏」を置き、須彌の東西に鳴鈇位を設け、東側の高卓に、湯、食、噉金、菓子、茶の供具を調へ置くこと、二、殿行は曲縁を堂外に備へ置くこと

同じく種智を圓にせんことを

三、鈇は東側（向つて右）を甲鈇とし、西側のを乙とする。四、鳴鈇の法は、左の通り打合せを要す。一、聲離位、二、聲進前、三、聲焼香、四、聲退歩、五、聲歸位。五、鈇の唇を捺する時は、カチツと音をさするか、又は軽く

の外は鳴鈇の規あり、卓の古規あり、二の時を前に加ふ、今五聲を、定カチら聲を、と堅きは聲を、出さずは聲を、宜しからず、行ふ所も、りふれど、爲め、チヤラ、と可なり、口此の焼香、の手に焼香、斯くあり、説く、手焼香、外立掌せぬ、居形には、整ばて合

六、出班焼香は、又手して進前、合掌して歸位と心得ると、七、兩班焼香法は東序の人は左手にて焼香し、西序の人は右手にて焼香すると心得ると、八、佛前にて轉身する時は、内側に向つて齊しく轉身すると、九、維那の宣疏の法は、疏を豎に採り、先づ可漏を三つ折にし、胸の間の衣の下に挿み、

それより疏を抜き出して、疏を残らず、一度に擴げ、兩端を持ちて宣讀すること、【上殿】齋鐘了つて、殿鐘三會、兩序は豫め並列す、住持上殿、大衆低頭問訊、住持は正面にて和南し、直に佛前に進んで焼香、此時、焼香侍者は頭首位の後より前卓の西序に進み、請客侍者は知事位の後より前卓の東に進み相對して立つ、

多少折衷して指南する

口三返目の時、大磬を捺するも二聲、次も亦同様なり

●出班焼香法を參照せよ、念誦の地堂香問訊なき念誦心を得て可なり

●大施餓鬼の疏に無持の疏に無き法と前にも云ふ如く、八月十五日の夜、若し其の他、場合に於て、行ふ時は、前日、比丘、王集、前日、讀むべしと誦

寶號招請陀羅尼」まで同様のと「發菩提心陀羅尼」は維那擧せず、小磬の棒を以て大磬を一捺すれば、導師「唵、冒地即多母怛波那野迷」と唱ふ、其聲の斷ゆる時、大衆同音之に和し、口三返の後、又同じさ順序にて「唵三昧耶薩怛鏝」を唱へ了つて、維那「大寶樓閣善住秘密陀羅尼」と擧す、之を一般の行法とす【回向偈焼香】甘露門終つて、維那「以此修行衆善根」を既

定の節にて唱へ、大衆合掌して之を唱へ、次の句順次に擧唱しては、大衆之を唱ふ、導師は第一句にて進前焼香、適宜の時に於て兩序を揖す、兩序は施架に近き者より、相對せる二人、磬子の音と同時に揖して施食架の前に進み、揖して後兩人共一步づ、中央に横に歩を運び焼香して、又外に一步戻り、内に身を轉じて住持の前に進み、揖して位に歸る、

【宣疏誦呪】兩序の焼香終り、回向偈終りたる時、維那は架前に進みて疏を取り、大施餓鬼の疏には總て三寶印を捺さず、可漏には上部に淡墨紙を用ひ之に「悲愍疏上、二十五類」と四字づ、二行に書くべし、香に薫じ合掌擎持して位に歸り宣讀す、文に曰く。

大日本國某府縣某州某市町何山何寺住持比丘某、今月十五日伏て法歲周圓衆僧自恣の辰に

値ふ謹て現前の比丘衆を率ゐて、覺皇寶前に詣し以て微供を辨して普く河沙の功德を施し法施を加へて諸來の群類を救はん者なり、竊かに以みれば業山の幽邃、日月の光も照す事能はず、苦海の嶮浪賢聖の力も渡す事能はず、智梯も便り無きが如く、慈航も術をも失ふに似たり、梵釋も如何ともすると能はず、諸佛も徒に手を拱くと雖も、釋尊方便

臨時の場
合には「安
居同修」を
「至心同修」
と改めば可
ならん

臨時修行
の時に「兼
日漸修」を
改めて「現
前所修」の
經呪力を可
ならん

を廻らして衆僧威神の力を借り、目連慈母を助けて飢饉極重の苦を救ふ、安居同修の威神力を尊ぶべし、已に、三世覺皇の佛智力に超ゆ、和合衆僧の功德聚を疑はず、頓に業定受苦の罪惡聚を消す孟蘭盆供此より始まり、大施餓鬼勤修するど久し、是を以て兼日各々漸修の經呪力、漸く此界他方の業苦海を驚かし、今夜如々圓頓の心王呪、頓に妄想

實受の浮塵山を崩す、若然らば現前の微施沙界の飢饉類に供へ、群聚含類無量無邊の法供養を受け、頓に無爲實相の法味に飽足し、速に逍遙自在の安樂に遊戯して、存亡齊しく導き怨親普く利せん、謹て疏
維時曆年八月十五日、何山何院住持比丘某謹んで疏
宣疏了りて疏を元の處へ安き、焼香問訊して位に歸る

▲南無楞嚴
會上佛菩薩
の前啓は總
て楞嚴會以
外には用ひ
ざるものな
り、但し摩
訶訶は必
ず讀誦すべ

次に楞嚴呪を擧す▲
誦呪行道(小磬等常の如く)
次に摩訶梵を擧す、大衆和す
畢つて回向、文に云く
上來、大佛頂萬行首楞嚴陀
羅尼を誦誦する功德は無盡法
界一切の含類、財法に飢饉せ

第四、小參法

【緒言】小參には左の種類あり
通常の課罷。當晩。
今は通常小參より説くべし

無量の鬼神、惡趣の群生、
邪魔僻徒に回向す、法味に飽
満して正智開發し、廣く衆生
を度し、同じく種智を圓にせ
んとを、
十方三世云々畢つて鼓鈸三通散
堂

【小參法】豫め住持に開申して
「小參牌」を掛け、法堂に法座を
設け、座前の卓に香爐と燭臺と

古南あり宿泊りも
指人少く宿泊りも
其日少く宿泊りも
歸散すのく宿泊りも
のなれずれどる中
必ずるを法執
行するを法執

謝語は開
の時は普
格別な省略
に可はる者
格別な省略
に可はる者
に可はる者
に可はる者
に可はる者
に可はる者

口得度は
大事に於ける
元師永平の
元師永平の
元師永平の
元師永平の
元師永平の
元師永平の

(一) 侍者は門首、兩班、勸奮、
貴賓、諸山諸寺院の留り宿す
る者の姓名録を住持に呈す
(二) 時至つて巡版小參敷一會
(三) 新命入堂(通常小參と同)
(四) 提綱の後、侍者より呈し
あける姓名録につき、一々謝
語を叙べ、了つて相揖して新
命は歸方丈、大衆散堂
以上三節を見て、小參法を知り
得べし、式は上堂より簡潔なれ
ども商量は自由の分あるを貴ぶ

古人は小參にての研鑽多り古
徳曰く小參は定所なし、寢堂法
堂等師家の指揮に一任す、大概
時節は晩間なり、若し法堂なれ
ば住持登座す、式は五參の上堂
と同じと、
【行者等へ訓誨の小參】若格別
に行者に訓誨の小參は行者寮の
前に掛牌し昏鐘鳴に行者寢堂に
集つて、參頭、住持を請出し參
頭先焼香九拜、説法了つて一同
三拜散ずる也

第九編 臨時法式

第一、得度式作法。

【準備】室内正面に先づ佛像或
は祖眞を安じて香華供養し左に
本師の座椅を設け卓上に手鑑、
灑水、灑水枝、戒文、戒尺、剃
刀等を安さ、預め直綴、坐具、
三衣、鉢等を整へて之を佛前に
備ふ
【鳴鐘入室】時至り鳴鐘して衆
を集む、本師佛前に焼香して三

拜し著坐す、侍者發心の人を引
いて佛前に焼香三拜せしめ、本
師の前に進んで焼香三拜して長
跪し或は胡跪して合掌せしむ、
【十佛名】本師自ら手鑑を取り
香を焼いて微音に唱て云く
南無十方佛、南無十方方法、南
無十方僧、南無本師釋迦牟尼
佛南無歷代祖師菩薩同じく威

佛も之れ在家にては成道した
まはず、歴代の諸祖一人も亦
是れ出家の形に非ずと云ふと
無し、かるが故に功徳の中に
は出家の功徳を勝れたりと爲
す、譬へば七寶の塔を立て、
高さ三十三天に至るが如き功
徳最も大なりと雖も、出家の
功徳に比すれば百分の一にも
及ばず、乃至算數譬喩も及ぶ
可からず、寶塔は破壊して微
塵と成り長年に其の形を見

ず、出家は增長して佛果を成
じ、歴劫にも其功を失はず、然
らば此の即身を捨てずして、
遠く凡夫の地を越ゆ、縦ひ未
だ證果せずと雖、已に是れ眞
の佛子なり、三界衆生の中に
は最尊の人なり、六趣受生の
間には殊勝の生なり、思ふ可
し永劫流轉の身心を轉じて、
永く不退無生の佛國に生ず、
無始の妄執今日已に絶し、本
有の實徳當座に圓成す、然る

降を垂れて、共に證明を作し
玉へ
三遍畢つて千盞を措いて戒尺を
鳴すと一下して云く
仰いて大衆を憑んで念ず、
大衆同音に十佛名常の如し、一
名毎に鳴尺一下す、十佛名畢つ
て又一下して告て曰く
善男子（或は善女人）心源湛
寂にして法海淵深なり、之に
迷へる者は永劫に沈淪し、之
を悟る者は當處に解脱す、解

脱の道に遊戯する、必ず出家
の法に在り、諸佛道同の儀式
にして、即得解脱の表準なり、
誠なる哉疑ふ可からず、身心
をして道と一如ならしむると
は、出家に越えたるは無し、
所以如何となれば、髪を斷す
るは愛根を斷するなり、愛根
纒に斷すれば本身即ち露る、
衣を換ふるは、塵勞を出るな
り、若し出てぬれば即ち是自
在なり、是を以て三世諸佛一

×流轉三界
中恩愛不能斷棄
の文は諸經
要集に清信
士度人經を
引きたりと
りて記載しあ

問 出家して以後は天地すら
尙覆載せず群類と豈混雜す可
けんや、圓頂已に覆物無し、
方袍是れ解説の幢なり、見聞
悉く巨益を蒙り、親族必ず
勝果を得、位三界を越え、徳
十方に高し、國王も之儼に及
ばず、父母も之れ儼より尊か
らず、神祇冥道も皆な是れ下
方なり、師長に非ずんば禮拜
す可からず、佛祖に非ずんば
敬す可き人無し、かるが故に

云く流轉三界中恩愛不能斷棄
恩入無爲眞實報恩者と、儼
方に父母生成の徳を思ひて專
誠に拜辭し國王水土の恩を願
みて、如法に報答せよ、是れ
出離の現證にして即ち尊貴の
異徴なる者なり、守宮神に告
げて今生加護の恩を報じ、生
所神に申して發心出家の事を
知らしめよ、是の如く報知せ
しめば守宮神は永く守道神と
爲り、天地神は各々護法神な

×善い夫か
能く世の無
常を棄て無
俗を棄て無
泥洹を趣く
希有にして
思議に難く
△三と訓ず
中三流轉の
つとに恩斷
恩を棄てず
無爲に入ら
はんに實入
者なり報ゆ
りて報ゆと

らん
【剃髮】發心の人一拜して道場
を出て、先づ國王を禮し、次に
氏神を禮し、次に父、次に母、
各一拜して還つて佛を禮する
事三拜して、終に本師を禮する
事一拜、胡跪して合掌す、傍人
先づ髮を以て左右に束ね別く、
次に本師剃刀を拈じて偈を唱ふ
ると三遍す大衆同音に和す、偈
に曰く
善哉大丈夫。(或ハ大)能了三世無

常一棄俗趣泥洹一希有難思
議
偈了つて香湯を頂さに灌ぎ、本
師剃り始めて剃刀を傍人に與へ
て剃ら令じ、先づ左を剃り、次
に右を剃る、剃る間偈を唱ふる
事三遍、本師之を擧す大衆同音、
偈に曰く
△流轉三界中、恩愛不能斷。棄
恩入無爲。眞實報恩者
右偈了つて亦た本師左の偈を擧
す大衆同音に數十遍唱し剃り了

ずる所一切に我
今皆懺悔と
ん梵語のサ
はマの過
漢譯の一字
との集めたり
るものなり
即ち悔過の
義なり又
身口意を
「身口意」と
なすあり
上尊、歸依無
法離塵、依
歸依僧和合
尊と唱ふる
義にあり、意
るに少し、な
取捨を論ず
るに及ばず

僧の三寶に歸依し奉る可し、
三寶に三種の功德あり、謂ゆ
る一體の三寶、現前の三寶、
住持の三寶是れなり、一度歸
依する時、三種の功德悉く
圓成す、
本師灑水枝を把つて順に器水を
旋轉して先づ自の頂に灑ぐ事
三遍、次に弟子の頂に灑ぐ事三
遍、次に右邊に灑ぐ事三遍、四
恩を報答す、次に左邊に灑ぐ事
三遍、三有を利潤す、了つて本

處に安じ、合掌して授けて曰く、
弟子、某甲今身より佛身に至
るまで、南無歸依佛、南無歸
依法、南無歸依僧、歸依佛兩
足尊、歸依法離欲尊、歸依僧
衆中尊、歸依佛竟、歸依法竟
歸依僧竟
本師三唱し、弟子三和す、了つ
て本師唱へて云く
已に邪を捨て、正に歸し了れ
り、如來至眞等正覺、是爾が
導師なり、今より以後佛を稱

口沙彌戒と
は八種の別
一戒の中
一は沙彌
シラマ子
てより比丘
の者なるま
息慈等と譯
せり

して師となして餘の邪魔外道
に歸依せざれ、大慈大悲大哀
愍故。
弟子三拜して胡跪す
三、沙彌戒 師又告げて云く
次に沙彌十戒を受くべし、此
戒を受けて後は大僧と利養を
同くす、此れを應法沙彌と名
く、此に勤策と稱す當に頂受
すべし、
不殺生戒、今身より佛身に至
るまで汝能く持つや否や

發心の人答へて曰く
能く持つ
次に不偷盜戒、不姪欲戒、不妄
語戒、不飲酒戒、不著華鬘瓔珞
香油塗身戒、不歌舞作唱往觀
聽戒、不坐臥高廣大床戒、不
非時食戒、不捉金銀錢寶戒、右
一々今身從り佛身に至るまで汝
能く持つや否や、能く持つと三
問三答す、右了つて師云く
上來十支の淨戒一々犯すとを
得ざれ、汝能く持つや否や

●六種震動
起は、震動、
吼は、の形、
種は、の形、
の種は、の形、
三の種は、の形、
三の種は、の形、
三の種は、の形、

以下同じ若し、省略する時は戒名のみにて可也宜し。汝能く持つや否や、(三問三答)
以下第二不偷盜戒、第三不貪姪戒、第四不妄語戒、第五不酤酒戒、第六不說四衆罪過戒、第七不自讚毀他戒、第八不慳貪戒、第九不瞋恚戒、第十不謗三寶戒、(右一々今身より佛身に至るまで汝能く持つや否や能く持つと三問三答す)右了つて師曰く、上來十支の淨戒、今身より佛

身に至るまで汝能く持つや否や
發心の人答へて曰く
能く持つ(受者三拜す)
本師曰く
此の事能く護持すべし
【回向】本師香を燒さ合掌して唱へて言く
此の時に當つて十方佛土の中に瑞相顯現す、地六種を動し、華四種を雨降らす、菩薩能化に白して言く、此れ何の奇瑞

發心の人答へて云く
能く持つ(三問三答)
本師云く
是の事是の如く持すべし
弟子三拜す
四、三聚淨戒 師又告げて云く
已に三歸十戒を受け出て出家位に入り了れり、次に三聚十重を受れば即ち諸佛の位に入る是れ眞の佛子なり
第一攝律儀戒今身從り佛身に至るまで汝能く持つや否や。

能く持つ(三問三答)
以下第二攝善法戒、第三攝衆生戒、(右一々今身從り佛身に至るまで汝能く持つや否や能く持つと三問三答す)
上來三支の淨戒今身より佛身に至るまで汝能く持つや否や
發心の人答へて曰く
能く持つ(三問三答)
五、十重禁戒
師又告げて曰く
第一不殺生戒(梵網經戒文入

本位に就く
北の類
を前

- 七、維那は新命三拜の間に入室し、聖僧の後を過ぎて上間版の前に到り、下間を向いて立ち、新命の坐具を收むるを待つて、間訊して新命を迎へ、上間より下間を新命を引いて巡堂一匝し、了つて南頬の畔に立つと
- 八、新命は正面に還つて聖僧に間訊し、直に本位に就くと
- 九、此時維那は龜の後より新命の前に到り、觸禮三拜、新命

- は答禮一拜すると
- 右にて僧堂挂搭式は終りたる也
- 【佛殿】順序左の如し、
- 一、僧堂挂搭式終らんとする時、佛殿の鐘を悠く鳴すと
- 一會、大衆僧堂を出てて東西に雁立すること
- 二、兩班門首は新命を引いて上殿し、各班位に立ち、門首は直に磬子の處に至る
- 三、新命正面に進み、此時大衆低頭す、法語を唱へ、進んで

×此時焼香
侍者は香合
を捧ぐると
三門の時今
如し、の時は
焼香の通一
皆其の通り
行ふべし、さ
るは説かざ
るは五三拜
に警三拜な
三注意すべ
し、土地堂
△土堂の法
堂鐘は佛殿
と祖堂の時
遠隔なる時
のなれば正
式におくば
きど、あま
り近き時よ
しは、畧すも

- 焼香、退いて展具三拜
- 四、門首は一拜毎に一磬鳴す
- 五、新命の坐具を收めて南面するを待ち、兩班は上首より轉身て土地堂の前に到り班位に立つこと
- 六、門首は新命を引いて土地前に至る、新命は法語を唱へて焼香、揖して南面す
- 【祖堂】順序左の如し
- 一、土地堂法語終らんとする時、侍真行者は祖堂鐘を鳴すと一

- 會、大衆祖堂に上る
- 二、門首新命を引き、新命法語、焼香、展具三拜、具を收めて南面す、
- 三、大衆、兩班、門首、新命の順序にて方丈に赴くと
- 【據室】準備及順序左の如し
- 一、方丈室中の正面に椅子を設け、椅子の前の卓に銀燭一對、香爐一個を備置くと
- 二、祖堂より行列し來りし大衆は方丈の外に到り、雁立し兩班

限りは甚だ
しむるに
むれん修
せざだ
らむれん
亦隨喜
の者之を
めて之を
瀆して人
對して之
寺を粗末
する感末
さしめざ
やう注意
なれど老
心なき婆
なり爲に
置くと説
り置くと
▲行の法
前處を參
の處を參
せよ香者
には焼香
本來は請
も者なれ
侍者も客

就き、檀信徒總代と幡燈とは門
内の左右に立つ、新命は門外の
机の前に立ち、法語を唱ふ、侍
香香合を捧げ新命焼香問訊す
●大衆は此時普同問訊すべし
●手磬二聲、柝一聲、鼓一聲、
三回にて大播を打始む、
●大衆合掌末位先行にて本堂に
入る行列は前と行じきこと
●本堂に入つて兩班は各其位
に就き、檀信徒總代は客席に、
其他の法器は八尺間の外に置く

【入堂】新命本堂に入れば撃拆
一聲にて大播已む、大間の正面
にて法語を唱へ進て焼香退いて
展具三拜、殿行三磬を打つ
●新命具を收むるを見て知事の
上首一名位を離れて新命を揖し
土地前に引く法語焼香揖す
●次に祖師前に到り法語、焼香、
三拜、知事引いて大間に歸る
●知事位に還り、新命は佛前に
進み、焼香して揖す、此時大磬
三聲、祝聖諷經を修す、

故に新
口南來
命祝電
祝辭む
を讀む
側新少
に立つ
是れと
對す禮
らる可
賀者時
侍者の
香等請
費出に
●記考
●に僧
●法は
●規今
●さる
●今規
●に規
●に規

●終つて新命南面す、(若し祝拜
を此處にて行ふ時は「祝拜之に
て」と呼び侍者請法香を燒き、
一同三拜、新命答拜すること)
●大衆兩序新命を引いて室中に
赴く、其他は前の法に詳し、
【略視篆法】呈狀と、兩展三拜

とを畧する時は新命、室中にて
寺印を視、侍者に渡す、侍者は
直に之を包み、知事と相揖して
位に歸る、時に堂行手磬を鳴ら
して普同觸禮三拜、散堂のと、
但し、印を見る前の式は本作法
に説ける如くすべし、

第三、祝國開堂法。

【準備】一、入院晋山の式終れ
ば、維那は堂司をして三門頭
の「接住持」の牌を下し、左の

牌を法堂の前に掛けしむべし

今日 祝國開堂
維那(某甲)白

香左に●べく新經更なしの逐規も指堂所にと焼侍口す呼萬▲
 ののは僧かと命るにるた義一の、南清少於はか者拈るの萬々
 を右手大堂らを自ま攻べるを度一勅な規して、しに香な祝歳々
 の、香清ず否らて究しも錯香侍修れ等、行今む香のりとを三
 手従を規、む焼はを、の綜一者清どの僧ふ日を後 稱三

- 他の侍者四人は知事位の後より進んで内陣の東側に立つと
- 三、殿行は法堂入口の曲縁、卓子を收却ると
- 四、焼香侍者は斜に卓の左側に跪き、双手を以て香合の蓋を取り、爐の左の方に仰向に置き、双手を仰向けて大香を蓋に入れ、捧呈すると
- 五、新命は大香を蓋より取りて双手を以て當面に拈じ、祝聖の香語あり、此時焼香侍者は

- 香合の蓋を元の處に置くべし
- 祝聖の語に云く
- 此の一瓣香、欽んで寶爐に
- 燃さ、端に爲に祝延し上
- る 今上 皇帝聖壽萬歲萬
- 歲萬々歲▲
- 六、右の 今上 皇帝と唱ふる
- 時大衆齊く北面低頭すべし、
- 七、三呼の後陛下、欽 惟れば
- 等の祝語を唱へ、香を侍者に
- 渡す、侍者之を香合の蓋に受
- けて蓋を香合の上におき、大

と指南あれ
 ども今定め
 らるのみ右
 焼く時大香
 を動かさぬ
 やうに心を
 べしう心す
 堂に三開
 香を焚かす
 *る常例か
 のは四上さ
 六頁の處に
 詳記しおけ
 は前章を熟
 讀せよ問訊
 △此の問訊
 を木問に古
 古木の杖と
 古木の杖と
 師説に聞

- 香を右手にて爐中に挿れ、次に從香一片を焼く、
- 八、次には開基、大檀那、高祖太祖、開山に供養する香、皆侍者捧げ、拈香の後、侍者が爐中に挿むなり、但し最早從香は焚くべからず
- 九、次に嗣承香、之は新命が懷中より出して自ら焚く
- 【問答】白槌、問答、提綱、自叙、謝語、拈則、結座、白槌等は常の上堂と同じ、*

- 【下座】一、右了つて新命下座
- 本山本寺の專使、他宗の尊宿、白槌師、貴賓等の前に到り一々揖謝して階前に歸り、南面して衆同相揖す、△
- 二、此時焼香侍者は大香合を持ち、請客侍者は拄杖を持ち、衣鉢侍者は七條衣を載せたる盆袱を持ち、他の侍者と與に先づ出堂して待つ
- 三、門首は新命を引いて出堂、大衆散堂、常の如し、

はりされど
立つやうに
するに非
ず、莊嚴等
▲莊嚴等の
關する注意
並に作法の
注に其の注
上堂は其の
釋と法未
尾とに揭げ
たれば必
對照あり
口者ある
勅修清規
を指す規
等は

【注意】開堂は専ら祝聖の爲なれば、問答は禁忌の語を慎むと久參の者三五名を限りて商量せしむべしと云へり、「五岳は唯一人」とも云へり、大衆皆出づるも可なれども、簡潔にして宗意の徹せんを期すべきと勿論也又住職 辭令書を宣讀するは、舊時の繪旨を宣讀する例に依れるなり昔は又は公文等とも云へり、即ち今の住職辭令と同じ意味なれば、今の法を妥當とす、

第四、授戒會

其一、準備

【緒言】授戒會の規式は、宗門の大事にして詳しく説明すること、許されざる所なれば、總て口傳に依ると肝要なり、されど、室内の大事の外の、準備、形式等は、大體説明するとすべし何となく靴を隔て、癢を搔くの思あるは宗風の然らしむる所、

今は唯其方針を示すに過ぎざる也、授戒會は師家によりて種々の異りたる作法あり、其旨甚深にて概説すべからず、今は一師家の行ふ所を主なる根據として解説すべし

【手續】大要左に掲ぐる如し

▲授戒會修行認可願を宗門當路者に差出すと

●願書、届
書、文案等
は別に文案
を指示して
見せる

●配役寮制
の未頁に
記載しお
見よ

●配役は依はつ
日配役は依はつ
著帖に依はつ
で定むるも
の故に到著
帖には住所
安居先は勿
論、法臘を
年月日を記
入せしむる
を要す

ふ、配役は戒場の準備員即ち法
類又は組合等と戒師との打合せ
にて定むるを常とすれども、正
式には教授師、引請師、直壇、室
侍は戒師の直命、其餘は此四名
の協議により、戒師之を任命す
るものなり。

【配役の式】配役の式は一同行
茶位に整列して、戒師より配役
表を読み聞かせ、了つて口宣、
其餘の細きとは直壇、室侍、維
那等より訓示するところあり、其配

役表は見易き所に貼りて聞き誤
りを補ひ、時を見計ひて直壇寮
に移すべし也同時に寮割を掲示
して、其任を定め直に準備に著
手せしむべし。

其二、啓建

【戒弟到着】曉天より粥後まで
は恆規の通り、請鼓にて内外掃
除をなすこと
玄關に戒弟到着所の札を掛け、
洗足器（又は雑巾の類）を用意

●編者等
戒弟の住處
氏名等を一
々を思ひ
國籍を
住所を
姓名、法號、
紹介、寺院等
の欄を設け
たる長五寸
五分程の二
寸五分程の
五分程の二
寸五分程の
勤戒簿と與
配布の置き
勤戒簿の記
入戒師の時
とせしむる
之を参り
之を参り
三、人、者、
に記入せし
に記入せし

し置き、優婆塞と、優婆夷との
二つの机を分ち、直壇、又は直
僚の内、地方村落、市街等のと
を能く知れる者二名位出張し
て帳簿に到着順に住所氏名を
記載すると、其節必ず左の二項
には注意すべし、如何に混雑す
とも忘るべからず、
（一）、正戒なりや、代戒なりや
（二）、法名あらば、即時に提出
されたし、若し、今記憶なく
ば、明朝の飯臺後までに直壇

寮へ持参されたく、其後に至
りては、折角法名ありとも、
當方にて無きものとして取扱
ふべきとを、熟々申聞けると
【荷物、臥具】荷物は荷物係へ
住所姓名等の札を付けて預け入
れしむると
臥具も同様目印の札等を付けて
臥具係へ預けしむると
【迎聖】午前十時頃、知殿より
直壇に照會し、時間を見計ひ、
殿鐘三會、迎聖を行ふ

執り方、便法を
得たる、利あり
り、参考の爲
に、記す、爲
×、三献茶湯は
り、三献茶湯は
り、三献茶湯は

の、施齋、經終
の、施齋、經終
の、施齋、經終

戒師上殿の時、鼓鉦三通、普拈香、獻茶湯、普同三拜、一同座具を収む、

(若し、戒師に開白文ある時は其指圖を受くべし、開白文終つて)

つて)

【啓建歎佛】直に小鐘一會にて啓建歎佛、獻茶湯、散華道場周匝、歎佛中の七佛名號になる時に、齋鐘を合するやうにす、

【精靈諷經】歎佛了つて殿鐘を打出し、其間に直壇燒香にて諸

精靈に獻供、(大悲呪回向)了つて第一會を擧げ、引續き第三會まで擧ぐ

【上供】教授師燒香にて本尊上供、歴代祖師まで併せて獻茶湯心經にて回向、了つて三拜

【施齋諷經】小鐘一會、七下鐘にて戒師上殿、

讀經、送經了つて散堂、露地手磨に從つて送供は魚鼓を打ち出すこと
【飯臺】戒弟行鉢、維那の宣疏

常とするが
故に、適宜
の、食器を用
ひしめ、又
は、補缺と
て、備へ置
たり、必要

▲本堂の東
を優婆夷西
を優婆夷東
定、南無三
に、諸佛三
札、佛三
之、佛三
む、佛三
る、佛三

の時、直壇は施主に行香せしむ
【飯後因縁脈說戒】維那後唄文(處世界云々)の後、手磨に從つて直に打磬(知殿寮擔任)
心經三遍緩々と讀む
因直係、室侍寮へ照會して、戒師上座、因縁脈授與、續いて説戒あるべきと、
【禮佛】説戒終つて禮佛、其法は、維那「三千佛名經」に依り一佛毎に擧唱し、戒弟之に和して、「南無三世諸佛」と唱へて

禮拜す、禮佛の時、必ず、補導師又は禮讚師出勤す、拜席を空位にすべからず、
【施齋諷經】晡時に藥石の施齋諷經あり、戒師上殿、以下午時と同様のと、了つて戒弟藥石、(但し藥石に宣疏は非法なれども、施主に對して宣疏し、般若心經を讀誦す、)
【壇上禮、佛祖禮】藥石後、時間室侍寮に問合せ、小鐘一會にて、壇上禮、佛祖禮、戒師多

を用ふるを
尤めずとも
可ならん

△小參ある
時は、前
小參を打
すべし

*此時戒弟
に大間の中
に入らむ
べし、未だ
順列なき故
に、進

▲當り人の頭に
小旗を挿しに
女子は髪を
之を挿しに
西を紅とす
東を白とす
如きとも
あり、南無
釋迦
牟尼佛の
名を三宗の
佛を可とし
又三寶を
重んずれば
も、斯く云
ふ、師家
に記すは
此多し

大鐘三會了つて、五更の五點を
鳴し、直に殿鐘を打出す

【戒弟を起す】殿鐘三會、朝課
諷經、祖堂諷經の五十七佛の時
に戒弟を起し、朝課罷に大般若

を修するもあり、夫より禮佛、
臨時説教、(此間に大衆飯臺)施
齋諷經、戒師焼香例の如し

【朝參の拜】施齋諷經了つて、
戒師は須彌前に南面し、*曲様に
倚る、直壇口宣に云く、
之より戒師様(又は戒師前)

へ朝參の御拜、戒弟一同立つ
て三拜

手磬を鳴して戒弟一同三拜す、
(若、△小參ある時は前に口宣す)

戒師は立ちて歸寮、
次に教授師、引請師も同様のと

【順列】粥後、請鼓にて大衆内
外掃除、戒弟は飯臺位に順列せ
しめ、若し不參者には代僧を加

へ置くことす、
飯臺位の順列定まりたる處にて
直壇は左の口宣をなす

戒弟御一同へ申す、今日晝
より毎日一サア飯臺でござい
ます」と申したらば、只今あ
並びの通りに御著座下さい、
兩隣の人を能く覺えて、彼
方此方と我儘を云はぬやう
夫より東西に引分けて順列、東
へ何人、西へ何人と振分け、其
組の頭に相當の目印を附け、直
寮にて能く調査し、直壇口宣す
さて、是より巡堂を致します
巡堂とは何の爲ぢやと云ふに

大切なる此の戒法を受け、御
血脈を滞りなく受けるには
諸佛さま初め並に伽藍神方の
加護力を蒙らねば中々容易に
調へ難きとてあるから毎日一
返宛寺中を廻り、守護下さる
様にと御願ひの巡堂である、
其處で私の手磬を聞いたなら
ば、何方にも頭を下げなされ
ませ、其れ故に巡堂中に話を
禁じます、各々心中に南無釋
迦牟尼佛と一心に唱ふるど、

東此等の事
は總て人政
の多少に由
る定説ある
に非ずと知
るべし

太極に巡堂せらるゝやう、
若し加行位に引くならば、太極
側を二行に引き男僧を太間の下
に北面せしめ、次に尼僧は左の
上間に引き（一行二行は人の多
少に依るべし）優婆塞優婆夷は
上間より引く、之を普通とす、若
又東西引分なれば、見切の通り
中央より引分け了つて口宣左の
通りになすべし、
大切なる金銭、據なく持參な
らば必ず腰を離さぬ様に心懸

る様、荷物は其係りの人に預
け置くと、戒會中は門外へ出
でざると據無く出るとは、
直壇寮へ願ひの上出入するこ
と、偕て又煙草を吸はずに辛
抱出來ぬ方ならば茶頭寮にて
吸ひ、決して道場近き處にて
は相成らず、食事の節話はい
はませぬ、先づ順列と申すは
あらまし、此の如きものであ
ります、前後の人を覚えて居
るが第一である、又授戒中の

△請拜を行
ふ日は第三
日と確定す
るに非ず、
今は假に斯
く定む、後
の備考を見

説教を忘却せざる様心懸るが
肝要であります
【順列の後】馬中歎佛前日の如
し、午時上供施齋諷經、戒弟行
鉢後、因縁脈授與、説戒、禮佛、
晡時施主諷經、壇上禮、佛祖禮、
臨時説教、戒弟打眠、都て前日
に一如すべし、

其四、第三日

【請拜】曉坐より粥後まで前日
の如く、巡堂了つて、口宣

今日請拜と申して、戒師様へ
御血脉を願ふのであります、
焼香を致すとは一人づゝ焼香
すべきを四衆の戒頭が代りて
香を焼きます故に左様に心得
て手磨に従ひ御拜を一同なさ
れよ
戒師を請し請戒には男僧戒頭焼
香了り、位に歸り、次に尼僧
戒頭、次に優婆塞戒頭、次に優
婆夷戒頭、一同焼香了つて更に
男僧戒頭中央に進み、大展三拜、

口氣候とは
前編の人事は
の處を參照
せよ(四頁)

此の時手磨に從ひ、戒弟一同三拜、戒頭は坐具を收め、長跪して云く

生死事大、無常迅速、戒師大和尚(又は禪師)大悲大悲、愛感聽許して、我等が爲に、佛祖の大戒を稟受せしめ玉へ戒師答へて曰く

四衆稟戒、感激に勝へず
戒頭又致語を唱ふ

即日氣雲(氣候)伏して惟んみれば大和尚尊侯起居萬福

●順列帳をなし
割印をなす
たる戒金を納
票を渡す

曉天より粥後まで前の如し、戒弟の行粥終つて、直壇の口宣、之より巡堂が終つて、三遍目の巡堂の節、報恩金容納であるりますから、各々失念なく、持參せらるゝやうに

直に巡堂し、直壇は適宜の處へ戒金容納所を調へおき、巡堂の後、東西へ引分け置き、小鐘一會にて大衆は内陣にて歎佛を修し、戒弟は、加行位に就き、禮佛す、其間に順次に戒金容納を

觸禮三拜、戒師出堂
次に教授師南面す、戒頭燒香前の如く、致語に曰く

和尚大慈大悲、我等が爲に教授師となりたまへ
觸禮三拜、次に引請師南面、致語「引請師」と改む、其他教授師に同じ、
請拜之にて終る、其以下は總て前日に異ならず、

其五、戒金容納

終るなり、以下前日に同じ

其六、懺悔舍身

曉坐より晡時まで前日の如し、今晚懺悔道場の用意は、室侍寮にて協議を調ふべし、懺悔帖は直壇寮の所轄なり、藥石了つて次第順列して其の坐位にて禮拜させ置くと(此間佛祖禮あり、了つて引續き禮佛)懺悔道場調べ、且つ昏鐘を聞いて懺悔道場へ引込み懺悔、一同了つて七下

▲此夜各寮の間に回禮多し

鐘にて直壇先導、次に戒師、教授、引請師、室侍等にて壇上前に進み、戒師前より戒弟へ垂示あり、了つて懺悔帳焼却、謝拜、一同三拜、此中戒師より戒弟へ垂示あり、維那藥王品を擧す大衆須彌の左右に立列して眞讀す木魚緩々と打つべし、壇前に焼香（補導師が室侍にて代香）戒弟一行づゝ引き壇前に低頭せしむるのみ、四衆本位に歸り了つて、手磬に準じて大衆眞讀を止

む、戒師並に兩師の南面を見て、直壇手磬三聲、戒師錫杖三振して南無本師釋迦牟尼佛と擧唱す打磬、直壇先導、三師室侍、隨喜更衣衆一同にて戒弟を遠匝すると三返、三師南面のとき、直壇より一同へ謝拜を報じ、三拜小鐘一會にて壇上禮、戒弟其儘にて禮拜、了つて、戒弟打眠、大衆恒規の如し、▲

其七、登壇

◎滿散施餓鬼と云ふ、附施餓鬼は正午に切るべし

曉座より午下迄前日の如し、粥後に戒弟へ口宣左の通り、今曉は大切なると云々、入浴の時心付け不潔のなき様、男僧尼僧共に剃髪を致すと、男衆は頭を清潔にし、女中は櫛簪は御無用、衣服も別段美麗を好むに非ず、洗濯物にても可なり、只だ清淨の衣服を用ふるを第一とす、今日は朝より湯茶に氣をつけてひかへる様に致されよ、

午後説戒の後、代戒精靈の爲に大施食修行、藥石も繰上げ、手早く用意のと、道場隨喜並に道場口宣は戒師察にてなし、各寮への報告は室行之を行ふ、道場莊嚴の次第は、直壇室侍にて指揮すべし、幔外のとは口訣あり、知殿寮にては壇上の手氈合せのと、蓮華蓋のと、東西の階子を堅固にすると、掛け燭を幕の上に用ひざると、蠟燭の心切用意のと、洒水器二對（但し長さ七

＊頭香
＊明治初年
の頃のことなり

衆退散、此時大開靜、非法なれども、而も見聞の爲めに行ふと多し、但し、あまりに喧擾をなし、戲論に渡るやうのとあるべからず、笑聲を其間に挟むが如きは、尤も戒むべし。

其九、備考

●第一日の開白は、戒師の家風に依り、ある時と、無き時とあり、
●第二日以下の歎佛は、曉天夜

＊是等の諸
種の舎身の實法
は編者の所な
見せらるるも
行はば、今も
行はば、今も
とる師家のありし

時は、線香を戒師一同に配布し、戒師以下の三匝の後に取集めたるもあり、此時には濕雑巾を入れたる金盃を持ちて取集めを爲す、之も危険少からず或時は唯合掌せしむるのみにて、格別の式をせず、戒頭をして焼香せしむるもあり、兎に角舎身の意を表すれば足ると心得べし。
●南無本師釋迦牟尼佛を稱ふるとは近來諸方にて行はる、或

間に歎佛會を行ひ、禺中には歎佛せぬこともあり
●第三日の致語、第四日の戒金容納は一定したる日に非ず、地方の便宜により變更するごとあり、
●舎身につきては、從來頭香を焚きたれども、火傷の患ありとて近來は之を廢し、或時は藥王菩薩本事品の經本頓寫をなし之を戒師へ納むるを舎身の儀式となしたるもあり、或

は南無大悲觀世音と云へる時もあり、之も師家の見識に依る
●藥王品讀誦も、師家に依りて、他の經文と替ふるもあり、宗門の儀式漸く精神を離れて、形のみとなりたる今日には、是等のと深く論ずべからざるが、現況を見て痛歎し居れる頌徳もあるべし
●第五日の舎身と第六日の登壇等は、多くは室中のとに關す

×供養回向
とは、施回
り、經のとな

〔附記〕飯臺
の碗は赴粥
の法の重ね
てあり、中
載せざるに

佛、得戒本師釋迦牟尼佛、羯磨
阿闍梨文殊菩薩、教授阿闍梨彌
勒菩薩十方三世一切の賢聖、三
國傳戒祖師大菩薩、高祖佛性傳
東國師承陽大師、太祖弘德圓明
國師常濟大師、當寺開山某大
和尚、戒源師某大和尚に供養
し奉る、伏して願くは、稟戒の
四衆戒光、彌明に、能く煩惱
の昏を破り、隨喜の緇素勝因斯
に結び、共に菩提の果を圓にせ
んとす

三、供養回向×
戒は摩尼珠の如く、物を雨して
貧窮を濟ふ、世を離れて速に成
佛する、唯此法を以て最と爲す
仰ぎ冀はくは三寶俯して照鑑を
垂れ玉へ、上來度んで香華燈燭
茶菓珍饈を備へ、(經咒)を誦
す集むる所の功德は、(法名)靈
位に回向し報土を莊嚴す、只願
くは持戒を平地となし、禪定を
屋宅となして能く智慧の光を生
じ、次第に明照を得て定慧の力

*人員不足
の時とは、
導師とを別
ずすに及ば

能く莊嚴し萬行是れ具足す、乃
至佛道を成せんとす

其二、配役及寮割*

一、配役の一斑

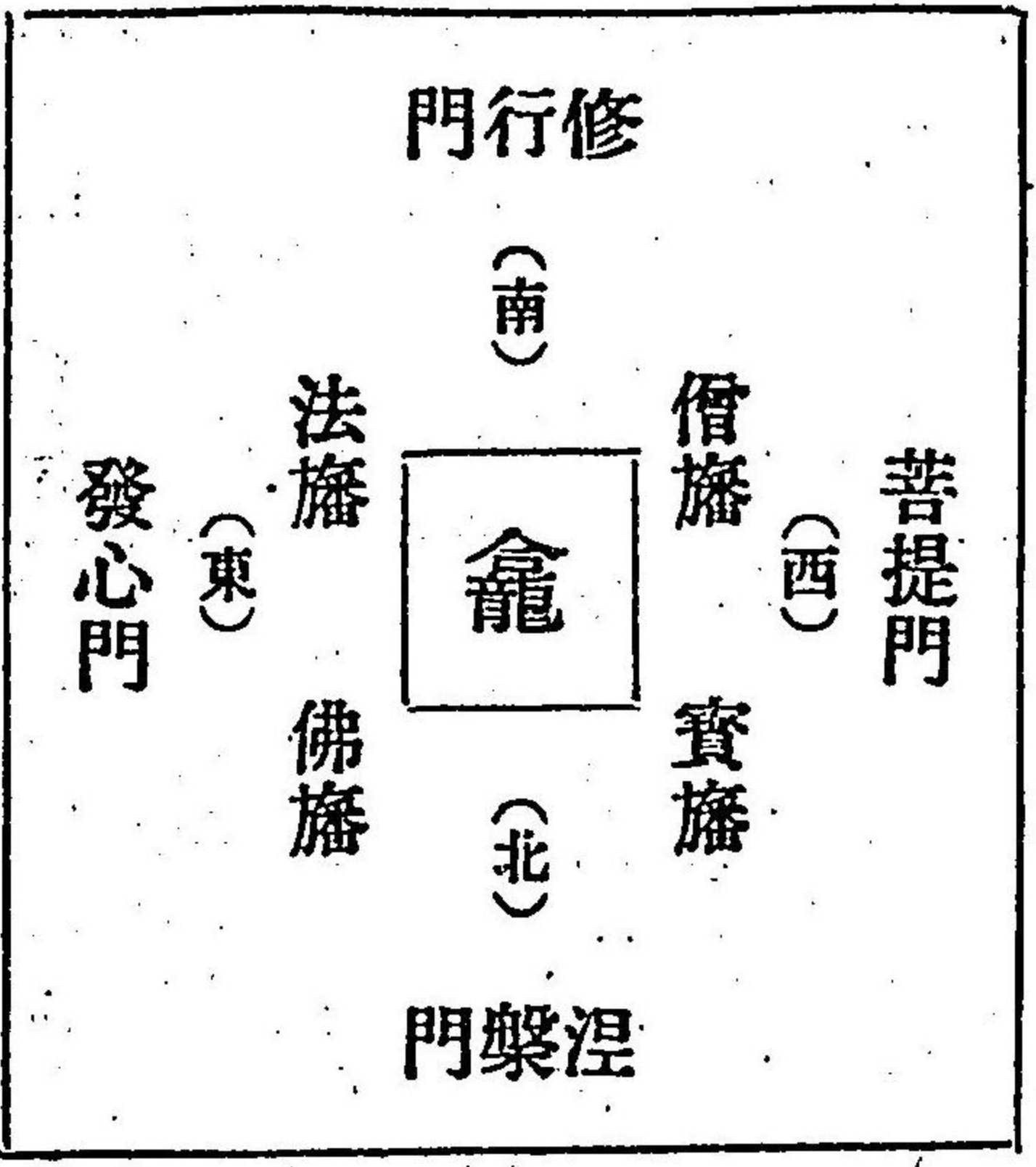
教授師 某老師 ● 引請師 某師
補導師 某師 ● 說教師 某師
先導師 某師 ● 直壇 何某
室侍 某師 ● 禮讚師 ● 典座
接客 某師 ● 戒侍者 ● 化主
因直 某師 ● 悅堂 司 ● 飯頭
知殿 副 ● 典 ● 送迎係 ● 水看

菜頭 ● 直書記 ● 直知庫 ● 看糧
荷物係 ● 直僚 ● 因直 ● 椀頭
● 般若係 ● 施食係 (之は兼るもよし)
戒侍香 ● 教侍者 ● 教侍香 ● 供頭
方行 ● 檀務係 ● 直行 ● 油頭
水頭 ● 鐘點 ● 室行 ● 引行
堂行 ● 引侍者 ● 直雜務 ● 淨頭
大衆給仕係 ● 戒行 ● 化行
浴司 ● 教行
配役は法臘に隨ふ故、順序付
け難し、失念なきやう役名を
記す

○佛地御青門
 拂金縷萬丈
 條如纒今縮
 林與心結
 作同行人知
 贈與心結今
 不與心結今
 溫庭均行人
 柳枝詞の折
 句詞の折

に繞りて城の南門に入り、漸々空行して北門より出て、空に乗じて右繞す、還つて拘戸の西門より入る、是の如く展轉して繞ると三匝し已つて空に乗じて徐々還つて西門に入り、空に乘じて行いて東門より出て、空行右繞して城の北門に入り、漸々空行して南門より出て、空に乘じて右繞して、還つて西門に入る、如是展轉して繞り經ると四匝、是の

如く左右に拘戸城を繞ると七匝を經云々
 とあり、東西南北の四門は佛家として葬法に附隨せるもの、如し、今、發心、修行、菩提、涅槃の四門を龕に設くるものあるも、此義に依れるものならん、故に古來確定せる説あるに非ず、但し、自然に行ひ來れるものなれば、古傳を參照して説明す
 【四門の配置】其四門の配置左の如き古傳あり



【喪場略圖】因に左に掲ぐ
 (西) 燭臺 茶
 (南) 龕(北) 位牌 (又は) 香爐
 (東) 花瓶 湯

【法炬】法炬は長さ三尺二寸位とし、赤紙の尖を割きて炎の如くすべし、二本を用意す、
 【鑿子】は木にて作り長さ法炬に準ずべし
 【紙花】葬法に用ふる紙花は、紙にて作る故に斯く名けたるものにて支那にては離別の時に河邊に柳の枝を折りて去り行く人の袖に入るゝとあり、故に雪柳と云ひて、柳の葉の如くに作る、雪柳とは三月の比の柳の花の雪

* 娑羅樹は諸書に
の考證未だ
に考確信な
ども比叡山
し比叡山に
も諸名山に
は時々ある
更なる考ふ
きなり

の如きを云ふ、勅修清規には出
喪の時一本づつ持ちて、其數に
て人數を調ぶるとせり、され
ど今は必らずしも然かせず、龕
の四隅に之を建つる者又は前卓
等に用ふるが如し、四個花など
云ふ誤りもあるとなれば、單に
其事由のみを記すとせり、
【白華】紙花の外に白花（蓮華
等の形）を備ふるは、涅槃經に、
「其樹憺然皆悉く白と變ず」と
あるにより、白き花を作りて供

ふる也、之は娑羅樹のとなりと
云ふ、娑羅は四季變ぜず、所謂
常磐木なり、それが佛涅槃の時
には白色に變じたりとの故事に
基きたるものにて、紙花よりは
大きなるものを用ふとの指南も
あり、
【素花】其名勅修清規に出づ前
の白華と同じ

其二、葬法

一、示寂の時の心得

× 衣鉢印等
を封するは
後事なき用
の事なりと
意なりと、
勅修清規に
指南あり左
* 遺偈を左
方修清規と
勅修清規に
指南あり左
今も亦同じ
△ 門牌の案
は掲示文を
の部に載せ
たり、
▲ 計報の文
案は勅修清
規の文に基
きたるもの
なれども、
必ずしも斯
くせずとも
云はせよ、
例は示せ、
也尤も原文

【告報】示寂近き時は衣鉢、
等を徒弟等にて封すべし、さて
示寂せば行者は僧堂に往き、鳴
椎下し、「堂頭和尚大衆に傳語す
風火相逼り面するに及ばずして
違す」と云ひて大衆に報じ、維
那は鐘を鳴さしむ、一同方丈に
登り、弔慰の拜あり、小師（徒
弟）等に弔詞を述べ、其より遺
弟等協議の上、方丈に於て卓の
上に華爐燭を供へ、遺偈、遺戒
等の文ある時は、大抵左方に貼

りおくものとす、其寺の先住な
れば、方丈に移すに及ばず、其
隱察に於て同様に式を行ふべし
【門牌計狀】次に門牌を立て、
計狀を諸方に發す、其文案例に
曰く、

某寺主喪比丘某(名)
右某甲啓
山門不幸今日某日、緣盡 某甲
大和尚 忽入圓寂、謹以
計告 謹 狀 (又は以計聞
謹 狀)